1980

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年八月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

永樂町人　編輯

八月號

朝鮮臺灣瓦斯會社

第七十八號

向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會舘產業部の製品で御座います、事業の性質から『正しき製作』と『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
丁子屋洋服店

電話本局
長二二二三
四〇九〇
六九〇三
番

休日なし毎日夜九時迄營業——御用の節は店内クツ部御呼出被下度候

八月號目次

（大體原稿到着順に依る）

東遊……道評議員　足立丈次郎氏
花瓶……京城醫專　飯島滋次郎氏
赤裸々の世界……元山每日　西田當三郎氏
小話……覆審法院　伊藤憲郎氏
クロスワードパヅル……鈴木商店　澤村亮一氏
偶感……大垣丈夫氏
新聞に譽められるといふ事……東拓　尾崎敬義氏
僕の鑛山鑑定法……鑛業家　中川湊氏
キャブテンカップ罰宴に於ける答辭……朝鮮銀行　飯泉幹太氏
野菊……殖産銀行　金谷要作氏
題畫像……寺尾組　寺尾竹三郎氏
馬の話……警察新聞　神阪退三氏
感激のない生活……京日囑託　細井肇氏
財界我觀……京城日日　別府八百吉氏
自利々他……西本願寺　清谷惠眼氏
玉碎記……商工會社　諸岡榮吉氏
東京雜記……前田昇氏
高麗燒の話……富田商會　富田儀作氏
コブ取り日記……田村直一氏
有賀西崎兩雄碁戰傍觀記……鑛業會　德野眞士氏
續馬來雜話……燃料研究所　市村毅氏
代診……佛教慈濟會　小水眞二氏
朝鮮の溫泉……地質調査所　駒田亥久雄氏
京城漫筆……總督府醫院　廣田康氏
京城つれつれ草……殖産銀行　守屋德夫氏
貧乏人の子……赤誠同志會　淺岡信堂氏
左團次丈と僕……日之出校　大山一夫氏
勞農浦潮漫錄……廣江澤次郎氏
貧相な男に題す……永樂町人
『新作狂言おそろし銀行』……仁川　茂木和三郎氏
近詠五首……日本醬油　市山盛雄氏
蘇峰先生と私……殖産銀行　中島司氏
噫重患……平山牧場　平山政十氏
天災總監……經濟日報　小野久太郎氏
自働車と犬……加藤伯嶺氏
英一君……朝鮮及滿洲　古志斌郎氏
たより……朝鮮ホテル　伊藤龍氏
父……永樂町人
編輯後記……同人手記

雜題

無駄ばなし……雜筆社　平田久雄
編輯局閑話……雜筆社　石川利夫
漫畫大流行……雜筆社　吉田莊一
漫畫『飯泉氏』……本社囑託　笠原ふみを氏
漫畫『寺尾氏』……本社囑託　笠原ふみを氏
漫畫『松本氏』……本社囑託　笠原ふみを氏
東西南北集……雜筆社　平田久雄
頰杖ついて……雜筆社　石川利夫
茶を啜りて……雜筆社　吉田莊一
高級一言氏……雜筆社　石川利夫
病床十日記……雜筆社　一記者
龜屋主人論……雜筆社　平田久雄
南畫『山水圖』……婦人病院　衣笠茂氏

東遊

京畿道評議員　足立丈次郎

【二】

ゆかしきは時めく人の今もなほ
昔わすれぬ情にぞある

東海道車中

獨逸ダンネール博士と共に、農相を見送りて再び東京に行く、夜行列車は滿員にて辛じて兩人の寢臺を得たのであつた、車中ブロークンの英語で、半解の談話に厭き一睡すれば身は已に國府津驛にあり、横濱の震災後の慘狀に涙を催ふし、東京驛にて農相及ダンネール博士と別れ、長男長女孫等に出迎はれ宿に入る。

夏の夜の旅路のうさも忘れけり
異國人とかたりかはして

看板の東京

震災後の東京はバラックの東京と人は言へど、予は看板の東京と言ひたい、表面のみ大きな看板を以て飾り立て、裏面は極めて貧弱なるバラック建なるは、何物かを暗示するが如く皮肉の感にうたれた、東京の人々の震災直後の質實剛健なる復興氣分は、何時しか薄らいで、以前の輕佻浮薄驕奢氣分にあともどりはせぬかと、思はるゝ狀態のほの見ゆるは、如何にも慨嘆の念を禁じ得なかつた。

世を興し國にむくゆる國民のこころは長く變らざらなん

歸鮮

朝釜山の港に着き、直に急行にて歸城す、出て立ちし時の若芽のポプラーは今や綠の森となり、芽生えせんとしつゝありし苗代は長く伸びて朝露になびき、車中には扇風器さへ動きて、朝鮮はスッカリ夏の氣分になつて居た。

何となくすがゝしくぞ覺えける
高麗の都にけふ歸り來て

京城雜筆

淡き月

約二年ぶりに內地に行く、夜の連絡船に乘り込む、翌朝未明離床思ふ存分朝の海氣を呼吸せんと、寢卷のまゝ甲板に飛び出す、船は將に關門海峽に近づかんとす、夏の夜の淡き月、夢の如く空に殘りて、一抹の黑煙遠く空と海とを劃し、次第に明けゆくまゝに一つ一つ島山の見えゆくけしき、得も言はれず。

淡き月は殘りながらに一つ〳〵
あけはなれゆく遠のしま山
明けかたの海原遠く一すぢのけぶり殘してふねのいでゆく

岡山

岡山は予が數年在住の地、何となくなつかしく立寄りたきも、內地往復は何時も大急ぎにて直行するのが遺憾である、今回もセメテは數分間なりともとて、

しばしとてプラットホームに降立ちぬ吉備團子賣る聲懷かしみ

嗚呼上野博士

農業工學の泰斗上野農學博士逝く、博士は予と同期の親友である大阪滯在中危篤の報に接す取るものもとりあへず上京、博士の門に駈け付けしに、博士は已に黃泉の客となつて居つた、實に悼惜の至である、靈柩を送りて見返れば、標札のみ尙門に殘りて主人は再び其門に歸らず、嗚呼悲哭哉。

涙ながら柩送りて見返ればたゞ
名札のみ門にのこれる

車中邂逅

歸阪の車中、偶然佐藤功一博士と邂逅す、同氏とは共に久しく三重縣に在職し、伊勢氣分に浸りたる間柄なり、分袂後氏は外國に遊び、予は朝鮮に轉じ、相見ざること十數年、今日偶然同車、懽談旅愁を忘る。

思ひきや都の友とめぐりあひて
むかしかたりの旅路せんとは

大塊商相

大塊商相岡崎農相と共に、大阪府茨木なる予が本社の農事試驗場視察に來る筈なりしが、農相のみにて商相は差支ありて大阪より直に京都に行けり、依て茨木驛に商相を見送る、例のズー體を車窓より出して『ヤア足立君、豐くダネー、君が此會社に居ることは社長より聞いたタイ』と言つて、側に見送りの植場代議士を顧み『植場君、此人は僕の東拓時代の舊友タイ、君に紹介する』と言はれて、余は圖らざる光榮を感じた、農相は眞面目な苦み切つた顏して視察に努められた。

男は周衣を飜すと太い萬年筆を

京城雜筆

花瓶

京城醫專教授　飯島滋次郎

高麗燒よう！。

錆のある聲で、突然彼の鼻先に花瓶を突きつけられたのは、彼が京城へ來てから、十日とたゝない、夜遲くだつた。燒栗の出盛る時分だから、夜はもう霜を含んで、寒かつた。

高麗燒よう！、花瓶を抱いた朝鮮人……本町で彼の行手を遮ぎるやうにしたが、彼は足を停めて、陶器を眺める迄に、土地馴れてゐなかつた。只その男がずんぐりとした老人で、胸に髯が垂れてゐるのを一瞥しただけで、默つて行過ぎてしまつた。秋の夜に往來で、高麗燒を賣つてゐるのが、朝鮮らしくて面白いと思つた。それが老人だから意味があるやうに考へた名でも尋ねたら殘菊一枝香未殘、我是三朝舊史官と昂然と言ひ放つのぢやないかと思つた。

それから人に白高麗だの、繪高麗だのゝ、話を聽いたり、博物館で美事な壺や花瓶を觀るに從つて往來に佇む男がそんな尊い陶器を持つてゐる筈がないと斷じてしまつた。

其後花瓶を賣る老人には往來で度々遇ふので最初の印象が薄らいで終ひには花賣の聲より興味を惹かなくなつてしまつた。

やがて彼自身飲んだり食ふたりする事を求める生活が忙しくなつたので其老人の存在なぞはすつかり忘れてしまつた。翌年の秋のある晩である。夜霧で本町の商店の電燈や瓦斯の光はぼかされてゐた。彼は白堊の建物に沿つて曲ろうとすると、暗い裡から『且那さん』と若い朝鮮人が彼を呼びかけた。右手に提げてゐた風呂敷包を地面にドすと馴々しくよつてきた。

彼は不圖足を停める氣になつた久しく忘れてゐた老人の姿を急に思ひ出したのだつた。

『安いです、買いなさい』

男は周衣を顫すと太い萬年筆を一本引出して彼に見せた。

『あゝ萬年筆なら要らない、花瓶だと買つてもいゝんだがな』

彼は泌々と云つた、實際彼は花瓶が一つ欲しかつた、書齋にしてはあまり荒涼としてゐるので赤い花、青い莖を挿せる花瓶が欲しかつた。けれども窓の裡に陳列してある金銀を鏤めたのも、油のやうに光つたのも、彼の書齋には似合はしくなかつた。偽物でもいゝ、闇の裡を銀貨一枚づゝ手探りで渡して買へるくらいのでよかつた

『……花瓶だといゝんだがな』

彼は繰返して云つた。

男は怒つたやうに行つてしまつた、彼も風呂敷のうちから期待したものが取出されずに、不器用に太いペンだつたのに失望して唾を吐くとそのまゝ急いで歩いた。

◈無駄ばなし

平田久雄

◎朝鮮ホテルの伊藤さん、夜はチョイ〳〵散歩して居る、しかし氏が晝散歩したのは、曾て見うけたことがない『どうして夜ばかり選ぶんです』といふと、その答が振つてる曰く『夜散歩しますと、色が黑くなる心配がありません』と、因に氏は、外國語學校出身のうつくしいわかい人である。

◎大塚さんの園遊會の日、飯泉さんがバケツのやうな大銀杯をかゝえて、頻りに人に酒を勸めて居る、記者が行くと、あんたも一口……と、とう〳〵飲まされてしまつた、聞けばあの大銀盃が、三十餘名の選手を出し拔いて、見事セシめたゴルフ優勝大銀盃ださうな

――そんなことなら、タダは濟まされぬと、段々交渉してトウ〳〵自祝のため、本誌に一文を草することになつた。イヤ飯泉さんも骨が折れる、雜筆記者もこんなふうで、仲々樂でない。

◎朝鮮の三原さんが、何か一篇書くことになつた、その三原さんの曰くに『文を書くことは、丁度酒席で歌をうたふやうなもんですね、一度唄つて了ふと、あとは平氣ですが、最初の皮切りがドウもきまりが悪い……』

◎中野バン寅氏が朝鮮公論の顧問となる、バン寅とはチト物好き過ぎるといふと、石森氏の曰く『離れだつてさう思ふ、處が東京に行つて見ると、あの先生の港勢力は始めてわかる、そりやバン寅なかなか利けたもんですよ……』

赤裸々の世界

元山毎日社　西田常三郎

□

倶樂部階上のベランダからは海水浴場の全部が眼下に視下ろされる、若い人も居る、老人も居る男も居る、女も居る、内地人も居る、鮮人も居る支那人も居る、歐米人らしいのも居る、各種各樣の人が雜多に泳ぎ廻り、遊び廻り、飛び廻り、跳ね廻つて居るが併し、誰れが金持なのか、誰れが貧乏人なのか、何れが偉らいのか、何れが偉らく無いのか、何れが上官なのか、何れが下た役なのか、何れが主人であり、何れが下僕であるか薩つ張り判別は付かぬ、玆處には其麼した社會的階級的の差別は毫末も發見することは出來ぬ、只眼につく差別としては體軀の優劣と泳ぎの巧拙丈けである。

□

赤銅色に焦げ燒けた堂々たる體軀を以て拔手鮮やかに泳ぎ廻つて居る者には期せずして群衆の視線が集る、例へ夫れが賤しい其の日稼ぎの勞働者であらうと、擔軍であらうと頓著は無い、如何に富豪であらうと、高位高官の者であらうと貴婦人であらうと泳げ無い者には群衆は眼も呉れぬ、纖弱な體軀には一瞥も與へられぬ、何百人何千人と云ふ群衆の中で光つて居るのは只體軀の優秀な者泳ぎの達者なもの丈けである、彼等はあの廣い海水浴場を遠慮會釋も無く横行闊歩して居る、恰も自分の海でゞもあるものゝ如くに跋扈して居る。

□

だが併し夫れが一歩陸上に上がると今までの自由な赤裸々の世界は跡形も無く消滅して仕舞ふ衣物に依つて身分の差別が判然と付く、履物に依つて付く、帽子に依つて付く、態度に依つて上官と下た役とが分る、奥樣と女中とが分る、且那と丁稚とが分る、さうして其處に嫌やらしい虚僞と苦しい虚飾との世界が展開されるのである。

□

宣傳の爲めに吹聽するのでは無いが、元山の海水浴場は其の風光に於て灣形に於て、遠ふ淺さの點に於て、砂底の點に於て、海水の清澄な點に於て、加ふるに設備の完成せる點に於て恐らくは理想的と云ひ得らるゝであらう、昨年の如き延人員にして京城からの來浴者は五萬人を突破して居る毎日何千と云ふ人が海に浸つて居るのであるが、僕は海濱近かくに在る倶樂部階上のベランダから此の光景を眺むる時、何時も云ひ知れぬ一種の興趣を感ずるのである。

（一四、七、八稿）

其牢房は韓國時代からのもので

小話

京城覆審法院　伊藤憲郎

其牢房は韓國時代からのものである、造花を調べて見ると、辨當の塗箸と通常用ゐらるゝ鼻紙とで造られてある、勿論著色しては居ないが實によく出來てゐる。

私は思はずあまたゝび嘆息した差入れの辨當の箸と鼻紙とで囚はれの遣瀬なさを梅の造花に寄せたのであらう。日本人が朝鮮人か男か女か——雨の日か晴れの日か、或は全く無實の人であつたやら、造花の色は可成り古りてゐる、獄中に花を殘して去つた事、場所が場所丈に少からず私は心を動した

ひとやの花——京城大學でも始まつたなら犯罪研究室の戸棚に飾るべき一つであらう。

四、名

今日の審議會の議題の一つは、『朝鮮戸籍令施行後の今日、不動產登記申請人の氏名に名と認むべかざる稱呼（例へば金召史、朴姓女、李氏の如き）を附しあるときは之を却下することを得るや』であつた。

金召史、朴姓女、李氏——之れらは名前と認むべきかと云ふことを先決問題とする。

日本流に云ふならば、渡邊未亡人、松本女史、石川氏——どうしてこんなのを名前として受付けられるか……否定論の言分である。

いや、そうでない、これだけで手紙のやりとりは勿論財產の處分をして來た、今日では一般取引上同名異人で不都合を釀成し易いが名前には違いない……肯定論だ。

今は兎に角やがてこんな簡單な稱呼は廢止されやうが、朝鮮文化進運のバロメーターとはこんな論題を謂ふものか（十四、七、四）

一、舌

其舌は赤く爛れ上つて、中程のところが右から左へ掛けて三分の二ほど切れてゐる——隨分ひどく嚙まれたものである。

嚙まれた男は生命を取り止めた嚙んだ女は即座に引かれた。

男は、外に情夫が出來たので私を殺しに掛つたのです——こう蟲の息で答へる。いゝえ、男の深なさけ、强う心に泌みまして、思はずと——こう女は嘆くのである。

檢事の起訴は殺人未遂、併し女は現場から一歩も逃げては居なんだ、仲直りした內緣同志、酒宴の晩、招かれた者達が歸つてから二時間ほどしてからの出來事である

私は判斷に苦んだ、女の言に從つて、殺人にあらず傷害罪である『六ケ月』刑の執行を二年間猶豫したが、なぜそんな無慘なサヂスムスを女がしたか——ても不可解なキッスを行つたものゝと疑問は永く解けなんだ。

此頃である、或る老刑事の『其女はモルヒネ中毒者ではなかつたか』との話に、さては審理不盡であつたかと氣が付いたが今は後の祭りである——女もしモルヒネ中毒者であるならば……時心身喪失嚙まれた舌は全く災難に外ならぬ

二、眼

新聞は絕世の美人と謂ふ、法廷のうちそとは何百と云ふ人で揉み合つてゐる、往來には騎馬巡査まで出た。

私の係り事件ではない、然し私は一寸その女の被告を見たくなつた、一寸である、私は下の法廷に行つて覗いた。

美人とは思はなんだ、然しその眼——それは山中の湖のやうに靜かに落付いてゐた、夫殺しと云ふ女の眼、群衆はその眼を中心に前後左右に騷いでゐたのだ。

今も、その眼をはつきり思ひ浮べることが出來るが、眼こそ人生の不可思議な一つであらう、それに付けても——双思、親子、背反——いかにわれ〳〵はいろ〳〵の眼に心の交渉を持たねはならぬことか。

三、花

或はほんとの商買人の囚はれの手慰みであつたかも知れぬが、先頃或事件で雷本町署の留置場の中を檢證したら、暗い牢房の隅の上に一枝の梅の花の造花を見出した

クロスワードパヅルに就て

鈴木商店　澤村亮一

近頃西洋からクロスワードパヅルと云ふものが流行し出し、之に因んだ十字語浴衣まで都會で出來たとのことである。

今に京城でも耳隠しのハイカラ髪に十字語浴衣を著流して本町通りを素足でタ涼みに散策する若い新らしい婦人を見るかも知れぬ。

此クロスワードと云ふのは今更此處に説明するまでもなく縱横のかぎの暗示に因つて共通する適當な單語を判斷する遊戯で、碁將棋の如く戰爭に因つて相手方を傷めることなしに樂み得らるゝところに特別の面白味がある。

と云つて此祟拜者でもなければ亦一部の人の如く舶來ものに何でもケチをつけて西洋かぶれと貶してしもう程好奇と執著にどちらも囚はれて居ない、だから此遊戯が流行しようがすまいがそんなことは問ふところでない。

唯政界と云はず財界と云ず凡てが混沌として安定と落付を缺ぎて居る現在の社界に此んな遊戯が西洋でも日本でも多くの趣味に投じて感興をひいて居るところに非常に興味がある。

流行はよく其時代相を語るものであると先覺の士は謂つて居るが、さう考えて見れば此流行なんかも現代の世相に何等かの因緣が繋つて生の惱みが此んなところにまで滲透して居ることが窺はれぬでもない。

例へば獨乙は戰前縱のかぎの專制政治からカイゼルを思ひ起し、戰後横のかぎの社界主義からマルクスを引き出してパヅルの解決に苦悶し、英國では横のかぎの自由貿易主義と縱のかぎの保護貿易主義とに就てマクドナルドやボールドキンに暗示を得、日本では政友會が横のかぎの地租移讓を以て縱のかぎの政權を解かうと智囊の有り丈けを絞つて見たが今に十字語の判斷がつかぬので何か新らしい他に適當な文字もかなと頻に心膽を碎いて焦つて居る

縱横のかぎは夫れ夫れが異つた立脚點を有する理想で此二つの相反す二つの理想がクロスワードに於て都合よく一致點を見出したる場合に於てのみ理想は現實にぴつたり符合して渾然と融和し、各々が利害の分前を平等に負擔して恰も鐵筋コンクリートの如くに固く結びて離れない組織を造ることが出來る。

子午線と赤道を中軸にして大樣に描かれた經度と緯度の中にどんなクロスワードを彩りて神の暗示に咎へ平和の鍵を開くことが出來るかは古來何千年の間遠い我等の先祖より與えられた神の遊戯で今後も永遠に世界のパヅルとして小さい人間の頭を占領し、いつまでも惱ますことであらう。

偶感

大垣丈夫

雜筆社の石川さんから、何か面白い話を書けと、たび〳〵せめられる、處が御承知の通り貧乏暇なしで、良い題材を詮議するヒマがない、そこで不取敢下のやうなとりとめもない漫筆を書いて見た、採否はドウか社の御都合のよろしきやうに。

◎私は大分長く朝鮮にお世話になつて居るが、朝鮮民族には、やはり朝鮮民族の特異性があると信じて居る。

◎無頓著といつた處がある、臆病と思はれる點がある、勤勉でないやうなところもある。――それかと思ふと、半面には死生得喪を顧慮せず、敢然として殘虐的性格を發揮する一面もある。なか〳〵わかりにくい民族である。

◎舊韓國時代には、地方官はズイ分壓制をやつたものである、搾取を事としたものである、にも拘らず人民は唯々諾々と此の暴政に屈從したのである、否、平氣で、怡然として、その治下に、長い煙管で、ポカ〳〵と煙草をくゆらして居たのである。

◎併し、唯だそれ切りかといふと、さうでもない、時々爆然蜂起して、官衙を燒き、役人を殺し、凡そ殘忍性破壞性の極度を示現したといふやうな例もある。

◎どんなに呑氣なものかといふ適例に、日韓併合の際、帝國官憲が京城監獄の引繼をうけた時、官簿記載の人員（囚徒）より實際人員が三名多く、それを調べて見ると、何年か前に收容せられ、それつきり一度の取調べもなく、本人も亦た平然として徒らにその日その日を暮して居たといふウソのやうなホントの話もある。

◎それかと思ふと、その後京城新義州、光州等で、大袈裟な脫獄騷ぎあり、ズイ分多くの血を流して居る。

◎そこで、どうして或場合は從順に、他の場合では悍烈危激であるかと調べて見ると、規則がやかましく窮屈であるから脫獄騷ぎを起した――そして韓國時代には食物や衛生設備は殆ど成つて居らぬが、獄中では唯だ寢ころんで居ればいゝ、何もしないでいゝ、それ故何年でもおとなしく悠々とかまへて居ると解つた。こゝらの點はよく考へて見ねばならぬ所と思ふ。

◎會社や組合をつくつても共同觀念は乏しい、氣に食はぬと、スグ打壞しにかゝる。これは極近頃の實話だが、一流の紳士の會合に私も丁度列席して居ると、

『昔は兩班といふと、文武の職業を與へられ、一生安樂に暮したのに、今はその安樂が與へられず、却つて種々の稅金がかゝつて來る』

かういつた人がある。どれほど安樂――逸樂そのものを好んで居るか、――こゝらも民族性の一部として、ヨホドよく考へなければならぬと思ふ。

◇編輯室閑話

石川利夫

◎鑛業家の中川湊さん、痛快なことは、天下一品である『君んとこもおとなしくばかりして居ちや儲からん、○○を見給へ、儲けることは凄いもんだぜ、どうですチト町中へ乘り出して、社の二階を碁會所及び將棋指南所にするんだネ、そして資本家連にウント申しつけるのだネ……。』

◎同人の一人朝鮮鐵道の入澤さんに、原稿をお願に行かんとす、たま〳〵來合せたT氏『そりやダメだよ、あの先生のことだ、乾度おコトワリしますと來るにきまつて居る』併し同人聽かずして行くと、果して豫言の通り、然かも文句まで一言一句違ひなし、頭をかいて『イヤTさんはえらい、千里眼だ……』。

◎本町の高木德彌先生、何とか議員である、感心なことは、毎朝ザルを持つて、米倉町の市場に買出に出かける、二十年一日の如く而して先生の自稱に曰く、これをやると三德がある、第一經濟、第二運動、第三早起……と。

◎警察新聞の神坂社長、昔からお辭儀はうしろにそるものと決めて居る、そしてトウ〳〵一生それでヤリ通したのは、マサに人傑の一種である、えらい〳〵。

新聞に譽められるといふ事

東拓　尾崎敬義

○

一日ある雜誌社の老記者が訪づれて來て、雜誌の經營難を型の如く述べ立てた後、さて援助金をとの申出がありました。私は近頃の新聞雜誌の經營の困難なることに對し、充分の理解を有つて居るものから、甚深の同情を以て之を聞き援助金に就きては事情の許し得る範圍に於て、之を支出することを承諾したのであります。勿論其支出額は老記者の希望の半にも滿たなかつたのは已を得ざるとであつたのであります。

○

然るに其翌月の其雜誌を見ると老記者の筆で、私を、度胸のない小才子とかなんとかいふて毒づいた後、私の關係ある會社及其會社の同僚迄も何とか彼とかとコキ下してあつたのには、一寸イヤな感じが致しました。勿論金を貰つたからといふて、自分の筆を曲げてまで御世辭を云ふ必要のないとは言ふ迄もありませんが、實は數月前の同雜誌に齒の浮くやなう御譽めの言葉を頂いたゞけに、苦笑を禁じ得ないわけには參りませんでした。

○

嘗て私のある友人が出世哲學といふことに就きて、二つの秘法と稱して私に話したことがありました。其の一つは自已の宣傳といふことであります。殊に政治家などゝいふものは自已の存在を天下に宣傳することは一日として忘れてはならないといふて、後藤さんが何時も舞臺の花形として世間からヤンヤと云はれることは、一に此の秘法を心得て居るからである、などといふて居りました。

○

さうして、他の一つは新聞に譽められるといふ事であつて、死んだ早川さんが實力以上に世間に持てはやされたのは、一に新聞記者を操縱したこと——言葉を替へて言へば、惜氣もなく新聞雜誌に金を使つたことである、などと申して居りました。

○

此の言葉は詭辯と云へば詭辯でありますが、又多少の眞理がない譯ではなからうと思ひます。しかしです、大に而かしです。斯ることが多少とも眞理だといふ世の中には、私は眞面目な政治や實業は到底無いものと思ふのであります。自已宣傳に依る政治、新聞に賞められることを求むる實業に、何の經綸がありませう。何の權威があります。何の眞面目さがありませう。

○

乍併、一方に於て宣傳に乘る民衆と、金錢の爲めに動く新聞雜誌の存在するといふことは、社會の一大病根であると言はなければならぬ。毅然たる理想の下に生存する國民は、斷じて誤れる宣傳に乘せらるゝことはありません。確乎たる見識の下に存在する新聞雜誌が、何の金錢などの爲めに文を舞はし筆を曲ぐることがありませう。

○

私は青年の時、新聞記者たらんとの志望を抱いたことがありました。今でも實は此の希望を棄てたことはないのであります。時若し我に利あれば一つ新聞を經營して見やうと思ふことがないではありません。大見識のある新聞を發行し、純理性に國民を活かして行かうと考ふることがあるのであります。金錢に屈しない、威武に恐れない、さうして感情に捕はれない新聞雜誌の存在は、どれだけの力强さを國家民人に與ふるものであるかは、想像するだに愉快なことではありませんか。

○

新聞に譽められるといふ事は最大の權威であらねばならぬ。勳章よりも、何よりも、彼よりも、但し、求めて譽められることに何の意義があらう。況んや、金錢を使つて新聞雜誌に賞められやうとする事は、虛僞であり、詐欺であり、罪惡であると云はねばならぬ。

○

私は今の新聞雜誌に大見識あれと望むとの轉た切なるものであります。之に依つて、初めて眞面目なる政治も實業も出來るのであります。新聞に譽められるといふことに最大最高の權威あらしめよ。

京城雜筆

僕の鑛山鑑定法

壽町事務所にて　中川湊

◇

佐藤玄伯の『山相秘錄』を見ると、凡そ山中含藏の諸金其精氣を蒸發するに各々定れる形色ありて甚だ著明のものなり金精は華の如く、銀精は龍の如く、銅精は虹の如く、鉛精は煙の如く、錫精は霧の如し云々とあるが、僕はマダ精氣を認めて山相を鑑定する迄には到らぬが、多年の經驗から自然に鑛山の良否が感得せられる。

◇

僕は之れまで隨分澤山の鑛山を見たが、其の山の麓に行つた時に之れは駄目だとか、之れは有望だとか云ふ事が直覺される。しかし之れはどういふ理由で直覺されるのであるかは說明する事が出來ぬけれども今日迄の經驗によると、不思議にそれが百發百中して居ると思ふ。

◇

僕は何にも山相を見たり、瑞氣の棚引くのを眺めたり、そんな七面倒な事をするのではない、たゞ其の鑛床を瞥見した瞬時に、何者が與へて呉れる靈感か知らぬが、自然に鑑定が出來て、殆んど標本をも採取した事がない。そうして有望な山だと、上り二里もある所でも少しも足に疲れがなく、全く飛ぶやうに上る事が出來るが、此反對に駄目な山だと、僅か半里位の處が、迚も嫌で〳〵仕方がないうが、今日迄に心殘りのして居るのは其の山一つである。

◇

何にも僕は迷信家ではないが、多年の經驗といふものは恐ろしいもので、昌道の重晶石でも、僕が一瞥した一小區域だけで、百萬噸は大丈夫だと、鑛業會の理事會席上で咄すと、或る專門技術家は重晶石は百萬噸もあるものではない夫れは石灰岩を見誤りして居ると大變冷笑されたが、後で專門家が二日もかゝつて調査すると、果して此區域から九十萬二千噸といふ數字が出た。まあ何と說明してよいか知らぬが僕の鑛山直覺法は、劍道でいへば先づ無刀流といふ所だらう。

◇

朝鮮で今日迄に見た山で、僕が有望なりと直覺した山は三つしかない。其の二つは靑陽の重石と昌道の重晶石である、之れは幸に自分のものとして居るが、今一つの金山はとう〳〵自分のものにする事が出來なかつた。勿論僕の見ない山で有望なものも澤山あるだらう。

◈漫畫大流行

平田久雄

菊池長風先生のお宅を訪れると、玄關に一平戲畫『長風先生』と題する額が掛つて居る▲實によく先生を表現する▲誰でも感心する▲近ごろは、寫眞の引のばしや、油繪などは、はやらぬ、何でも彼でも漫畫大流行である▲本誌の讀者も我社囑託笠原文夫君を利用して貰ひたい▲氏のウデ前は、本號所載の飯泉氏や、同じく寺尾氏で御承知ありたい。

◈金剛避暑記

石川利夫

鎭南浦の西崎氏、今年は金剛山へ避暑と決めいち早く別莊の確約が出來てるらしい▲第一主人公が歌を詠み、文を作る、それに一門が夫人初め、一人として歌を樂まぬ人はない、加ふるに來訪者が大底歌か俳か詩をやる▲その上碁戰日錄といつたふうのものも出來やう▲要するに、氏の今年の金剛山中避暑日記は、資料頗る豐富と思ふ▲むろん、乞ふて來る九月號に光彩を添へるつもりである。

◈天下の碁權

平田久雄

公天寺尾さんと、高橋辯護士と出合ふと、スグ碁を初める▲しかし高橋氏は元來公天氏の敵でないので、ぢきに旗色が惡くなる▲スルト高橋氏『この仇は、將棋で討つ』と、將棋盤を持出す▲と、今度は公天氏があとしざりして『イヤもう解つた〳〵』▲公天氏は、碁は可なり强い方である▲しかし『何しろ有賀とか小杉とかいふ超等級がありますからネ、仲々天下の碁權は窺ふことは出來ません…』

キヤプテンカツプ罰宴に於ける答辭

朝鮮銀行　飯泉幹太

御誘ひ

——ゴルフの友へ——

六月二十九日　尾崎敬議

何々　樣

勝敗は時の運であります。

昨日の競技會に於ては圖らずも運飯泉幹太氏に在り、不幸にして總督カツプは遂に其の人に歸したる番狂はせを生じましたがこれも亦斯道の一興であり、敢て祝意を表すると申せば稗氣の謗りがあるかも知れませんが又當人にとつては胸中自ら多少快味がないわけでもあるまいから、此機に於て各位と共に聊か同氏の氣焰を聽く雅量を示すも時に取つての慰みとなるべく、就ては別段の趣向もありませんが來る七月一日午後七時京喜久に浴衣がけにてゆる〳〵御光來下さる樣御案内申上げます。

之れは尾崎君が僕を除いた當夜列席のゴルフ二十餘名に發した案内狀である。僕は主賓で正座に就くとアチラからもコチラからも飯泉さんおめでたう〳〵と浴びせかけられた。何んだか耻かしい樣な得意氣を感じたのである。尾崎君は例の落付拂つた態度で挨拶を述べられた。僕も左の答辭を述べたのである。

『今夕の宴會は尾崎君が私を侮辱した所謂罰宴であります。私は戰勝者として臨みましたが別に御禮を述べる必要もなければ勿論其の氣もないのであります。寧ろ御愁傷樣とお悔みを申上げる方が適當ではないかと思ふのであります

イカナ尾崎君でも今晩に限つては

挨拶を抜きにしておとなしく出るだらうと思つたのであります。所が君はマダ飽き足らないと見えましてシツコクも只今クスグツタイ挨拶をなされたのであります。只默つて飲まふと思つて來た私もコウ挑まれては仕方なく茲に答辭を述べねばならぬ破目になつたのであります。

私はゴルフ倶樂部中最も古い會員で而かも最も熱心なる年長者の一人であります。が第一回の競技會にタツタ一度一等賞の榮冠を獲たのみであります。其の後、王世子、總督、政務總監カツプ等色々立派なカツプの寄贈があつて十數回の競技會がありましたが、まだ一度もカツプをとつた喜びを體驗した事のないものであります。夫れで新進氣鋭の會員は私を老骨と敬遠して相手にしないのであります。イカにも殘念なので昨冬内地に武者修業に出懸けましたが却つて腕が鈍つて來たのであります。此の春大邱ゴルフ倶樂部に行つてプレーしてる間に不圖神樣から妙技の御教授を受けまして、夫れ以來馬鹿に當る樣になつて來たので嬉しくツて隨分自己宣傳に努力しましたが、ナンダ狐に取付かれたのだらう、精神に異狀を來たしたのではないかと云つて誰れも之れを認めてくれません。ソコで今度コソは何んでもカンでもキヤプテン、カツプをとつて此等盲會員にアツト云はせてやらうと云ふ大望を起したのであります。

私は平生大言壯語をするのでタマには東洋豪傑の典型だなどとお世辭を云つてくれる方もありますが、實は極めて小心で内氣で、コンナ場合に必勝の自信を自ら起す力がないのであります。ソコで他

京城雜筆

力によつて此自信を得る外ないと決心したのであります。

丁度競技開始の前夜六月六日總督接待の末席を汚したのでありましたが、『明日から閣下御寄贈のキャプテン、カップ爭覇戰が初まりますが今度は是非勝ちたいと存じます、其の前祝としてお杯を頂戴いたしたい』と申上げると何日見ても神の如く慈愛に富んだ總督は莞爾として夫れは結構、何んでも勝負するときは擔ぐに限ると申されて戰爭中に於ける面白い例を話してくれたのであります。此の溫かき激勵によつて私はドウしても勝たねばならぬと云ふ自責の念が湧いて來たのであります。

又其後無鐵砲にも出入記者に今度キャプテンカップを取つて其カップで一ツ愉快にビールを飲まふと確約したのであります。新聞記者と云へは一管の筆で國を興し又は亡ぼしたりする事の出來る恐ろしい方々であります。若し私が此約束を實行し得なかつた日には私の名譽、地位はオロカの事私を殺す位の事は朝飯前の事なのであります。コンナ工合で必勝の自信が日一日と強くなつて來たのであります。

丁度決勝戰の前日六月二十七日尾崎君と此所で會飲する機會を得たのであります。處が尾崎君は『飯泉君明日の勝負は思ひ切つて止したまへ、僕は君の相手にかけるよ』と突然私を侮辱されたのであります。諸君御承知の通り私は最早五十三歳になりますがまだ獨身であります、場合によつては結婚しようと云ふ念がないでもないのであります。場所もあらうに美人の前で折角出來た必勝の自信と獨身者の自尊心を傷けられたので、若し其時私に眞の勇氣があつたなら私の鐵拳は正に尾崎君の頭の眞中にメリコンだらうと思ふ程怒髮冠を衝いたのであります。が涙を呑んで『尾崎さん、もし私が勝つたらドウしますか』と訊ねましたら『勿論おごるさ』と輕く答へられたのであります。此時私は石に嚙り付いても勝つて見せると云ふ眞の自信が起つたのであります。實は當夜は酒を呑まぬ積りであつたが、コンナ事からトウ〳〵呑み過ごし二次會までしたのであります。『飯泉さん、あなたは明日と云ふ大切の日を控えて居るではありませんか、夫れにドウしてコンナにお過ごし遊ばしましたの？、あなたは尾崎さんから見縊びられて自棄を起したのではありませんか、ソンナ弱い事でドウして明日勝たれますか、勝敗は最後の五分間と云ふ事をよもやお忘れではありますまいね、コンナにお醉になつて猶二次會をなさるなんて、實に可愛想な方ではありませんか、もうお酒など召し上らず、早く御宅に歸つてユックリおやすみあそばしては如何ですか』と心の底から鬪げましてくれた佳人が居つたのであります。車上醉眼朦朧の裡にも、尾崎の樣な小面憎き奴の居る世の中にドウしてコンナ佛樣見たいな親切の方があるかと涙を以て感謝したのであります。

而して二十八日は宿醉と餘憤とを以て決勝戰に臨んだのであります。當日第一回の相手は勁敵澤崎選手で、技倆の上に於て、戰に臨んで苟もせざる點に於て、又如何なる彌次を飛ばされてもビクともせずに益々落付き拂ふと云ふ事に於て有名な選手であります。而かも只一人官僚を代表して意氣軒昂必勝を期して居られたのであります。處がドウ云ふハヅミか澤崎選手が當らない譯ではなかつたが極めて容易に私が勝つたのであります。殘る相手は川上選手か中村選手かと心配しながら午餐の食卓に就いて居ると、意地惡くも尾崎君は私の食卓に割り込んで來て例によつて毒舌を振つたのであります私は敢て應答せずに今に見ろ、アノ生意氣の息を止めてやるからと腹を固めて中村選手との決勝戰を開始したのであります。中村選手は美少年として、フラ〳〵ダンスの舞踊家として、球とおナラの泣き別れ曲藝家として、將又大正宮本武藏として勝負強い事に於て有名な方であります。夫れで少からず恐れを抱いて居つたが此時私の必勝の自信は益強くなつて來たのであります。戰は一進一退實に猛烈を極め十八ホールを一巡して無勝負に終つたのであります。見物

京城雜筆

人はクロスゲームと云つて馬鹿に喜んで居りましたが、私達に取つては實に苦痛の極であつたのであります。更に一ホールを決戰する事になつて名譽のキャプテン、カップは不幸にして私の掌中に落ちたのであります。

翌二十九日當時地方視察中の總督に感謝の意を表する爲め『五回の激戰に優勝し閣下御寄贈キャプテン、カップ第四回保有の光榮を擔ふ、茲に謹んで御禮申上ぐ』と發電したのであります。

此日尾崎君から人を以て七月一日君の祝賀會を開くから當日は他に約束しない樣に願ひたいとの話がありました。ソコデ私は祝賀は元來親しき方が心からの喜びを以て祝つてくれるのである。尾崎君の場合は口に税かかゝつた制裁である、罰宴である、祝賀ではない兎に角出てはやるが敢て禮を云はぬと一矢酬ひて置いたのであります。而して今夕はウント飲んで、ウント油を搾つて、シマイにアノカップで頭から酒をブツかけて今までの怨を晴らそうと喜び勇んで此席に臨んだのであります。……

處が今の今神の御告げがあつたので實に吃驚したのであります。後悔したのであります。怨は感謝に變つたのであります。其の神樣は大邱で妙技をお授け下さつた八幡樣であります。其の御告げによつて今度私の勝つたのは總督の溫情と、記者に對する自責の念と尾崎君の反對激勵の賜物である事がわかつたのであります。之を覺らず、尾崎君を怨んで惡口雜言したのは全く私一生の恨事で實に冷汗背に徹するものがあるのであります。尾崎君、否尾崎先生が今日までロを極めて私を罵倒輕蔑したのは全く私の弱い心に鞭つ爲めに故らに反對激勵を下さつた親切に外ならぬのであります。而かも今の今迄之を秘して御親切にも私の優勝を心から御祝ひ下さるばかりか私の最も親しき僚友を斯く多數御招き下さいまして至極行届いた此の御盛宴をお張り下さつた御溫情に對しましては何とも御禮を申上げる言葉がないのであります、其の上ゴルフ倶樂部に空前の善例を御開き下さつた廣大無邊の御考は實に大石良雄の夫より絶大なるものありと信じて誠に敬服に堪へないのであります。茲に謹んで私の淺慮無禮を御詫申上げ、併せて御厚情に對し滿腔の感謝を表する次第であります』（一四、七、二）

野菊

殖産銀行　金谷要作

◎野邊に咲く野菊の可愛いさを座ながらにしてめでんとて、神戸のさる農園から野菊の苗を五種ほど取り寄せた。

◎春咲紫の一重二種、夏咲八重が一種、秋咲黄色が一種、それに白覆輪の變り種が一種。

◎愛し子を育む樣な氣持で、只管に締粕の肥えを差したものである。十日に一掬ひ、五日に一掬ひさては三日に一掬ひと、精をやるにつれめき〳〵と生長して、あら二月とたゝぬ内に殘燭の芯の樣な元のみすぼらしい苗とは打つて變つた、肩で風を切る堂々たる濃綠の葉振りとなつたまではよいが、やがて咲いた花はとみれば、これはしたり、その威嚴ある葉振りとは似付きもしない氣の毒な程貧弱なもの。

◎餘りのいま〳〵しさに翌年は肥えはもとより水さへもやらなかつたが、まだ消え殘りの養分や洗濯の棄て水を吸ひ集めて、辛うじてさきの世の傲岸な面影を偲ぶだけにはなつたが、腕白盛りの子供のために葉はむしられ蕾はもがれて花も咲かずに立枯れ果てた、草叢の中では蟋蟀がチロリ〳〵秋の夜を寂しく鳴いて居た。

◎それなりに野菊の事はいつか忘れて居たが、今年の早春の或る朝、雪融けの大地を割つて伸び出でた野菊の萠芽を見付けた私は、生きんとする力の强さ、伸びんとする努力の驗を眼前に叩きつけられて、今更に此の小さな自然物の偉大さを感じ入つたものである。

◎不純な施し物の養分は既に吸ひ盡し虐られた後なので、萠え出るまでは中々に惱んだらうが、純な自然の雨露に惠まれてやがて伸び出でたのはしほらしい葉姿、それに咲いたのは其の姿にふさはしい色鮮な可憐な花、はからずも茲に會心の花を得たのである。

◎花までがみつしり苦まないと其本性に立返へらぬものとみえる

京城雜筆

題畫像

寺尾猛三郎

軍人を志して成らず。醫を學んで成らず。辯舌の人たらんと欲し、文章の人たらんと欲し、之くとして不可ならざるは無し。虎も用ゐざれば鼠となり『鼠隣』と號し、土工の群に投ず。別に公天と號し、詩書畫三拙の稱あり。和歌俳句俗謠、悉く自稱天狗にして、人に噫せざるの勇あり。圍碁は高山君（孝行）の壘を摩するに足れど。闘棋は高橋君（章之助）に對して顏色なし。斗酒を誇れども醉ふて泥の如く。妓を聘すれども歌ふことを知らず。平々たり、凡々たり。已に世を益する能はず、又自ら利することを知らず。此虎畢竟世を終るも、鼠中の小鼠ならむ。

頃來悟るところありて杜翁と號す。杜翁は土木の爺なり。呵々

獰顏怪貌正通眞。妙手畫未技入神。
唯恨平生長廣舌。胡爲寫得不驚人。

◈寺尾氏訪問

笠原文夫

『寺尾組の寺尾さん』と云ふより『寺尾學館の寺尾先生』とでも仰しやつた方が遙に相應しい程學識家として有名である。更に氏は南畫家としての靈筆の持主と承る。氏を訪へば直に座敷に通し茶菓を以て歡待される、流石鐵面皮な私も聊かタヂ〳〵とした。社に歸つたら松本さんからのお目玉は確實と思つたので、紅茶を十分の一程殘しておいた。其處で氏の尊顏描寫となつたが矢張り全部正直に描く事は又お目玉の原因となるので十分の一程お殘しておいた點がある、讀者御氣附になつても口外する事勿れ。

◈飯泉氏の時

笠原文夫

『鮮銀の飯泉さん』これだけで說明無用、それ程社交界の名士として又ゴルフ界のチャンピオンとして知られた人とは、石川氏の御說明。自分は御目に掛るのが今度始めて。さてスケッチをとペンシルを採つたはよいが熱汗三斗、氏の御顏が二重三重にも見える。此のシーンを目擊した第三者曰く『氏は口を固く閉ぢマドロスパイプをしかと握り遙か前方を御覽ぜらるゝ樣子、餘りに眞面目でお可笑しいやら御氣の毒やら、女事務員の盜視して噴き出すのも更に一興……』と此の話を後から承りそれでは漫畫は宜しく第三者の任務であつたと今更後悔……。

馬の話

朝鮮警察新聞社長　神阪退三

永樂町人から馬の話を書けと仰せられたが、私は馬そのものについては全く下手の横好きで何等の知識も持つて居りませぬ。たゞあの大きなからだの持主で、勇敢でそして從順で、よく人になつく可愛いゝ動物であると云ふ點に於ては、恐らく何者にも勝れて居るではありませぬか、殊に馬の動作が神秘的な又藝術的なことはこれ亦他の動物に優つてゐることゝ思はれます。

昔から神馬として神社の中に養はれ、或は神前の繪馬堂に馬の繪の額が飾られたことなど思ひますと、現代人も上代の人も、馬に對しては一種言ふべからざる尊い感念を持つてゐたものと思はれます

馬に對する神話は希臘羅馬の昔にも我日本の昔にも殘つて居ります、假に其時代の馬が今の馬より少さく劣つて居つたかも知りませぬが、何しろ馬そのものは神にも人にも愛育されたものであることは申すまでもありますまい。

櫻花さく春の山路を輕く鞭打ちて遠乘して萌え出づる若草の上に馬を憩ませた時の愉快さ。

三伏の暑熱に人馬共に汗みどろになつて柳の下に流るゝ清流に馬の脚を洗ひ、夕暮の涼風に向つて我家に歸るときの樂しさ。

秋高く馬肥ゆるの朝、鞭を擧げて憂々の音を金風に響かせる時の勇ましさ。

珊々として降る雪を袖に拂ひ、斷く聲に勵まされて馬場中を、右手前左手前の演習などは何と云つても馬に乘らぬ人には解することの出來ぬ情景であります。然も此樂しみは一人より二人、二人より三人と云ふ樣に、友の多ければ多い程興深いのであります。轡を並べて馬上煙草を吹かし、互に語り合ひつゝ旅行することなどはこれ又樂しい一つであります。萬葉に

駒並べて御狩に立てる若草を蹶路の小野に鹿は伏せらめ

とありますが、これは聖德太子御蹶の御歌であります——私共が我皇太子殿下が待從たちと共に御乘馬で御蹶に出させ給ひ、又英國の皇太子が常に乘馬で姫殿下と共に御蹶にお出ましになることを聞いて居りますが、即ち此樂しみは今も昔も日本も外國も同じことであつて、私共が馬で旅行することは自働車や自轉車などとは比較が取れぬと云ひたいのであります。

馬に乘ると云ふことは如何にも危險であると恐るゝ人もあるかも知れませぬが、決して危險なものではありませぬ。危險々々と云つて恐れるやうなら他動的な自働車なぞは更に危險であるかも知れませぬ、又危險が伴はぬと面白くないのであります。人間が危險を防止し、危險を除却し、安全に行く

〔一四〕

程面白いものはないのであります すべて運動と云ふものは皆危險が伴ひます、ボート、撃劍、柔道、野球、案ずれば案ずる程危險が伴ひます。馬に乘つてやゝ上手になる程危險なことをやつて見たい、障害飛術にしましても半米突より一米突へ、一米突より一米突半にと追々危險な方面へ進んで行く、更に步度をつめた輕い速足より驅步へと云ふやうに、危險を防いで安全に乘り廻すと云ふことが何より愉快であります。即ち其處に男性的の氣分が躍動して來るのであります。更に馬を御すると云ふ點についても諸種の技術を敎はり、終には一種の藝術として馬其者を御することがこれ又どんなに愉快であるかも知れませぬ。又馬其者の心理を研究し考察することも又面白いのであり騎馬をする人は良く云ひます『馬に乘るには即ち人と馬との約束を守れ』と、これは至言であります、即ち馬の心理を適度に應用することにあるのであります、即ち馬に乘る時に於て馬の立髮を撫で『已は馬に乘る法則に依つてお前の上に乘るが、お前は私の命令をよく聞いて安全に道を步め』と云ふのです。馬も亦『貴方の命令をよくきゝますが、どうか私を轉がさぬやうにまちがひの無いやうに乘つて下さい』恰も馬と人間とが夫婦約束でもするやうな氣分で此約束を實行すると、安全に瞰乘し得るのでありますが下手な人は此約束をせず、半端な人は油斷して此約束を忘れるから人馬共に轉んで思はぬ禍を招くことがあるのであります。

俗に馬が膝を折ると云ひます、馬術の方ではこれを陷膝と云ひますが、即ち陷膝は騎手の一番恥辱

であります、即ち馬は六本の脚で

を以て私の樂しみとして居ります

と實用、即道樂を經濟的に應用し

であります、即ち馬は六本の脚で歩いて居る、四本の脚と二本の手綱即ち二本の綱の使ひ方が完全に法則を守れば陷膝は無いのでありますが、どうかすると油斷して人と馬との約束を無視するからであります。馬に六本の足ありて、人間に四本の手があります、（六十五＋二＝二〇）の力が完全に働き、一體となつて動いて往くのでありますから、馬に乘ると云ふことは決して危險ではありませぬ。

私は十八歳の馬と八歳の馬と二頭飼つて居ります、二頭共東北產でありますが一頭の老齡は第何回かの雜種で、今日では純粹な日本種とでも云ひ得ましやう、然も此馬は至極溫和にして從順一度拍車を加へ鞭を入るゝときは精悍で敏感、他に敗けると云ふことは大嫌ひと云ふ性質を持つて居ります。一はサラブレット第一雜種であつて身長五尺二寸八分、其溫順なことは云ふまでもありませぬが、年の割合に極めて鈍感であります、私は今の陸軍大臣宇垣將軍が平壤に來た時馬の話を聞きましたが、日本の馬は日本の馬として造らなければならぬ、外國產の馬は見えは良くても戰爭には用を爲さぬ、日本の軍馬は日本の軍人の如く祖先以來傳統的な日本魂を持ちてゐるので、イザ騎兵の突擊と云ふ場合に敵陣に向つて突進するが、洋馬の大きい奴はさうは往かぬ、即ち日本馬は日本馬として馬體だけは外國種に、心は日本種にと云ふ風に作つて居るのだとの話でありましたが、現に私が二頭の馬を比較研究して如實に然あるべきを信じて居ります。

私は二頭の馬を私の家族として朝な夕な頭を撫で餌を與へ、これを以て私の樂しみとして居ります以外、私日々の用務に下駄となつて働いて居ります。

世の中は人力車、自轉車、自働車と云ふ樣に乘物が進歩して參りますが私は馬、馬が下駄、即道樂と實用、即道樂を經濟的に應用して居るのであります、私が年老いて馬に乘れなくなつたら其節は私は馬車に代へて私の業務に應用する考であります。

感激のない生活

並木町假寓にて　細井肇

○

私は今、內田良平氏が杉山茂丸氏に贈り、故あつて杉山氏から私に讓られた『日韓併合始末』を讀みふけつてゐた此書を反覆熟讀することこれで四五回目である。巷からは程遠い、忘られた、暗い街の底の、四軒長家の一番奥まつた借家——夕暗がたてこめて、机邊もほのぐらく、片肱突いて所在なさに心のうつろな時、どこからともなく、大連節とかいふのであらう、追分と大津繪をこきまぜたやうな聲調が、流れて來た。

○

——抱いて寢もせず
いとまもくれず
それでは、港〳〵の
つなぎ舟——

○

朝鮮の歌詞に譯して、陰謀の天才的民族であるところの朝鮮の人士に、例の長鼓（チャンコ）に合はして、妓生の纏綿たる聲調で唄つて聞かせたら、嘸かし手を拍つて、

善哉！善哉！。

を連呼するに相違あるまい。

○

產業主義の桎梏に、うつかり濁酒（マカリ）も汲めなくなつた詩の國、夢の國の末運のうつろい行くさまを憶ひながら、フト私も心附けば、此の禿山落木の半島の山河をおとづれて早や二十年、今や鬢髮數莖の白きを見る——（或る年の或る夏の夕）

財界我觀

京城日日新聞社　別府八百吉

財界中心勢力の消長と殖銀

時勢の推移に伴なひ財界の中心勢力消長し、その勢力を形成する當面の人物に異動を生ずるのは蓋し當然の道程であらう、數年前朝鮮經濟界の中心勢力は東拓と鮮銀にあつた、東拓は不動産金融機關としてはた又事業會社製造の母として、次に鮮銀は中央銀行に兼ねて一大商業銀行として、その勢威は隆々たるものあり、常に何事にも併稱されてゐたのである、然るに今日の狀態は果して如何、往年の二大勢力は殆ど消極化し、若くは老ひ……若返り手術中とあり……て著しく褪色あり、當時母の胎内にもめぐまず、後年漸く生れ出た殖産銀行に中心勢力の稱呼は落ちて來た、今日の財界は正に殖銀中心時代と評して差支へあるまい

仕事を大にしてゐるから勢力が蒐まるのか、勢力が隆々乎として加はつて來たため自然に仕事をする事になるのか、夫等の因果は何れでもよい、要するに今日の殖銀は不動産金融に商業金融に最も活動し、又最も信頼されてゐるのは事實である、朝鮮に於ける國家的の特殊法人として最も若い殖銀が何故に嶄然と頭角をぬき來つたかといふに、色々理由はあるが、その出生の遲れたため、財界最好況時代に手を擴げ得なかつたのと、朝鮮に營業區域を限局した關係上政治的に利用されなかつた事と、月並みに言へば當局にその人あり矣と稱して好からう、東拓や鮮銀が好景氣の波の打寄せ來るやジミな本家本元の朝鮮を殆んど閑却し内地や滿洲や南洋に大風呂敷を擴げ、盛んに積極方策をとつてゐた時、殖銀は日本の財界に認められても、認められぬでもよいといつた風に、實直にジミにその分限を守つてゐた、ために急轉直下的に襲來した深刻な財界不況の波もその受くる影響は輕く又淺かつた、從つて活動の餘力……能力は存してゐる、不況期に入つても要るだけの金は要る、その點に於て殖銀は供給役として活動し、不十分ながら朝鮮のために盡してゐる、仕事をしてゐる、乃ち資金の供給のみでなく、火災保險會社を創設して資金の鮮外流出を防止せんとし貯蓄業務を經營して小口資金の集積に努めてゐる如き一二の例である、從つて勢ひ殖銀の勢威はあがらざるを得なくなつた。

今一つ殖銀中心時代を形成するに至つた重要な理由がある、夫れは殖銀が朝鮮の銀行であり、總督府手飼ひの銀行と見られてゐる事

〔一六〕

である、新領土に於て官意は乃ち民意だ、云ふまでもなく萬事が官廳本位主義に行く傾きがある、東拓や鮮銀が朝鮮のみに固守してゐたならば、その受けた創痍は頗る輕かつたであらうし、朝鮮に於ける勢威は恐らく失はれなかつたらう、東拓からも鮮銀からも今日の殖産銀行はよくて弟妹少し下つて娘位に見へてゐるに相違ない、然るに東拓も鮮銀もその風呂敷を擴げると共に中心點を東京に移し、重役さへ在鮮させないと云ふ所さへあつた、新領土の官意が鮮銀や東拓にあきたらなくなり、自然殖銀に集中したのは當然と見てよからう、此點東拓は殊に甚しく、殖銀の伸張を見方によつては消極的に助けるやうにあつたやうだ。

たゞ世間の殖銀論を聽くと、總督府あたりの見解も創立以來堅實一方の經營をして來たとほめちぎるやうだ、然し吾人は此の殖銀推讃を無條件に受入れる譯に行かない、ムロン金融界に貢獻せる點の大である事は……殊に不動産金融に於て又端(はし)からはしの商業金融に於て夫れは動かしがたいのであるが、大正十年の京城株式熱狂時代の醸成、それに伴つて生じた新會社の濫設、續いて來る株式大崩落の及ぼした財界の深刻な痛手、之等の責任はその一半を當然殖銀は負はねばならぬ、大正十年と言へば、殖銀創立後間もない時だつた從つてその地盤の開拓に勢力の伸張に多少の脱線行爲は認めてよかつたであらう、然も純然たる投機株で又現物市場にすぎない京取株に甚しい便宜を圖つた、當時の商業金融當局は本氣の沙汰と思はれぬ程の多額の貸出しを、投機株に投機者流に一再ならずやつた、續

京城雜筆

いて他に此の種類の株式金融は續々とつけられた、ために大正十年八月京取株は百四十餘圓の高値に狂騰し、京取の奔躍に伴ふて諸株の昂進は著しかつたやうだ、株式熱の沸騰は當然株式會社の濫設を促し、資金の株式固定は異常であつた、然るに噴火山上の舞踏に均しい危險な形勢を見るや、殖銀はその權道に氣づいて狼狽の上主務課長を動かし、株式金融を閉鎖した、開放から閉鎖、此の大銀行の態度は小銀行にも及び、株式界の人氣並に基礎の面白からぬ新會社は異常の收縮と打擊を受けた、その結果の整理や減資や解散が一昨年來頻りに現はれてゐるのは世人周知の事實である、當時の熱狂は京城や仁川のみでない、到る所に遍ねかつた、從つて殖銀の投機金融化の如きは多く咎めぬでよいかも知れぬ、吾人は左樣に思ふ、唯その態度の激變、掌をかへしたやうな方針のたて方が面白くない、その結果起り來つた急峻の反動來の責任の若干は當然殖銀として避けられぬやうに考へる。

然し財界に對する殖銀の功罪何れかと言へばムロン多功多勳者たるに相違あるまい、殊に今日の殖銀は適切な金融政策を勸業上にも商業上にも把持してゐるのは具眼者の見解一致せる所と云ふべく、此の調子で進むとすれば殖銀中心時代は當分繼續するものと思はる、有賀氏の頭取重任は殖銀方針の不變遂行を語つてゐる、吾人は朝鮮現在の財況と殖銀の行き方から見て有賀氏の續任を歡びたい。

滑稽至極な鮮銀攻擊論

朝鮮銀行の第二次整理斷行の近い事は今度の正副總裁の更迭の經緯や、大藏省の方針などから見て疑ふの餘地はない、該案の內容は未だ正確に知りがたいけれど、銀行方針の緊張、政府の負擔增加、株主の犧牲といふ事になるやうだ同行株式の崩落は減資若くは減配を正直に語つてゐる。

鮮銀は大陸日本に於ける商業金融機關の心臟部であり大動脈である、その健否が鮮滿財界に及ぼす影響の甚大な事は多言を費すの必要はない、吾人は一日も早くその健康恢復を望まざるを得ぬ、これは必らずしも鮮銀のためのみでなく、鮮滿財界のためにかく冀望するのである。

所が不思議な事は、鮮滿在住の殊に有識階級の大官や財界の人々の間に、鮮銀を徹頭徹尾攻擊し、惡口し、日も維れ足らざる人の多い事である、鮮銀の解散や閉店が殆んど絕對的に不可能の事情にある以上、その過去の弱點や失態を痛論し罵詈した所で初まるまいではないか、過去の不行跡を云ふのも將來のためにあながち無駄ではあるまい、然も要は今後にあり、如何にその方針を樹て直し、いかに傾ける大屋臺を建てかへるかが焦眉の急務ある、商業會議所の聯合會などに鮮銀整理案の要望が出た事は一向に聞かぬ、が會議所の關係者が鮮銀をボロ糞に貶してゐるのは珍らしくない、これは豈獨り會議所のみならんやだ。

更に滑稽なのは鮮銀攻擊の聲の中に鮮銀の內容も知らず、人がいふから自分も言はねば氣がすまぬと云ふ連中のある事である、大正七八年頃の事と今日とを混同し、その間の推移を頭に入れぬものの

ある事である、重役も失態當時と殆んど變つてゐる、にも拘はらず同一の人物が今日も理事者たるかの如くいふてゐる者のある事である、吾人は鮮銀御用論をなすものに非ず、然も鮮銀の復活改造は今日の鮮滿財界として忽に出來ぬ問題だ、アンチ鮮銀論者の三考も四考も求めたいのである。

若し夫れ今日の鮮銀を直視し、重役は大任を負ふに適せず、又幹部に無能者あり、從つて鮮銀の前途悲觀の外なしといふ論者や、不可能な鮮銀否定論に對しては以上の所見以外に應酬せねばならぬが夫れは他日に讓らう。

◈編輯室から

吉田莊一

別府氏に囑して、本號から『財界我觀』を執筆してもらうことにした▲京城財界の成行を知悉し、歷史を解し、しかも判斷精到にして、いふ處頗る實際的なのは、別府氏の立論の特徵である▲記者は平生氏に服する故、こゝに氏を煩はすことゝしたのである▲政治論はこまるけれど、經濟論は大に振はしたいと思ふ▲平井（勸信）氏や、末森氏や、新田氏や、大和氏や、もとこれ立派な筆と意見とを有つてる人々である、どうか次號以下に、大に論陣を張つてもらいたいと思ふ▲尙ほ我社に對し、格別の好意を有つてる小野經濟氏が折にふれ一流の快筆を寄せることは、これまでの通りである▲西本願寺の淸谷布敎師、我社を訪ふて將棋をさゝれる▲勝つてもアハ、、、負けてもアハ、、、實に愉快なお坊さんである▲師、說敎に長じ雄辯無双の評がある。

自利々他

本願寺派本朝鮮開教々務所　清谷惠眼

勞働は神聖なり。

洋の東西を問はず、世界到る處に勞働問題は起り、吾朝鮮にも勞働問題が擡頭して、去る六月廿四日に、京龍館に於て土工組合發會式が擧げられたが、最近に亦大工石工等の組合發會式が、擧行さるゝとのことである。

元より勞働組合の目的は、勞資協調を基本として、各勞働者に生活の安定を與へ、組合員相互の福利を增進するにあると同時に、一面亦た資本家の出資に對する正當なる權利を尊重し、或る程度迄の事情を顧慮して、勞資兩者間の、權利義務を相互に尊重して、人類共同生活の本義を全ふする、然し亦其國家の特別の事情、或は其社會の環境如何に依りては勞資協調の中にも、資本側を本位とする事もあり、勞働側を本位とする時もあり、亦双方共に均等に取扱ふ場合もありて、臨機に善處せねばならぬ。

現在朝鮮の如きは、今尙ほ產業開發の初期であつて、多大な資本の投下を待たねばならぬ、夫れ故に穩健なる主義の下に勞働組合を組織し發達せしむれば資本家も安心の内に投資し、勞働者も安定の生活を得、引ひて國家も社會も安全に民衆の幸福を增進する次第である。

今を距る千三百五十年前の往昔出生し玉へる聖德太子は、實に我國文化の祖聖であつて民心綜攬、治國平天下の第一人者であつた。彼の十七憲法の第一條には

一に曰く、和を以て貴しとなし忤ふことなきを宗と爲す、人皆黨あり亦達る者少し、是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ、然れども上和き下睦びて、事を論ずるに諧ひなは即ち事理自ら通ず、何事か成らざらんと

是れ乃ち和を貴しとする、太子協調の精神は實に穩健である。

恰も好し去る廿四日の京龍館に於ける土工組合發會式には、式場の中央壇上に、聖德太子を奉安して、日本勞働總同盟朝鮮支部理事星出政雄氏が、座長席につきて、會則を審議し役員を選擧されたが其主義綱領並に會員の信條等が頗る穩健であつた、如是主義の下に今後も各組合が組織され、朝鮮勞働總同盟が完成されたならば、今後の朝鮮勞働者は實に幸福である、私は如是會の發達を衷心より希望するのである、同組合員の信條は、私の信ずる佛陀の、自利々他自覺々他、自他平等主義が實行さるゝを喜ぶのである、依て擱筆するに當りて同組合の信條を紹介せん。

一、正義を重じ弱き

【一八】

を扶け强きを挫く傳統的美風を世の推移に應じて善處すべし

一、浮薄なる世の風潮に溺れず質實剛健の氣風を養成すべし

一、產業に對する使命を自覺し世界の大勢に善處すべし

一、組合員各自は其隸屬する組又は雇主の事業に對し獻身的に忠實に努力すべし

一、自覺ある國民の權利を主張すると共に義務を怠る可らず

一、攝生を重じ身體を健全にし以て能力の增進に努力すべし

◈漫畫小話

平田久雄

飯泉さんの漫畫が出來る、氏に見せる、すると曰く、どうも書き方（畫家）が堅くなつてるね、もつと〳〵僕を漫畫化しなくッちや……▲そこで、笠原氏（畫家）につたへ、思ひ切つて筆を飛ばせたもの、本號載する處のそれである▲尙飯泉さん曰く、僕を描くなら、まアこの鼻の特徵をウント利用しなくちや……知らず笠原氏、どれだけ利用し得たりや▲第三者曰く、ウッフ、これだけ利用してありや文句はないネ。

ない位でしたよ』

方共に均等に取扱ふ場を論ずるに諧ひなは一、正義を重じ弱きや文句はない。

京城雜筆

玉碎記

朝鮮商工會社
平壤支店
諸岡榮治

久しく樂浪の珍品を手に入れなかつたMは久振りに玉豚二個を手に入れて折から調査に來て居た其道の人に、

『これは九號墳の發掘品よりずッといゝ而かも女夫だから又妙だ、玉の艶も色もいゝし、姿もいゝし彫も面白い』

と盛んに讃められてすつかり悅に入つて早速床の間に麗々しく飾り立てた。

白神先生の言葉を拜借して云へば、

『豚はWEE、WEEとも何んとも云はずに……』

靜かに二千年の昔を有力に物語つて居ました。

× × ×

それと相前後して某校のT教諭は、これは又目もあやなる許りの金銅の熊を手に入れて同好者をアット云はした。

『これは一體何んだつだんでしょう』

『ははあ、漆の脚ですか、そうすると外にも二つ許りある筈ですね』

『殘り二つは一貫堂主人がせしめたそうです』

『へーどうですいゝ恰好ですなア、このキョトンと坐つた手足の具合から顏の細工……殊に隆起部に嵌めた玉の象眼なんてとても素敵なものですな』

こんな話しを脇で聽いて聞かぬ振りして居た先生は熊の突き出した鼻のように高くした鼻の先きをピコピコさして欣んで居た、それから先生は居ても立つても熊が忘れられなかつた。

一日の敎務を終つて歸ると『お歸りつ』と云つて飛びつく御子さんより先づ熊に逢はねば氣が濟まなかつた。

そして幾時間も〳〵熊をいぢつて一人で頻りと感心して居つた、しかし先生は生きて居た。

二千年も前からじつと蹲坐したまゝで居る熊のような具合には行かなかつた。

則に立たなければならなかつた。

先生は其間も惜まれた、張り切れそうな奴をとう〳〵我慢し切れなくなつて大事な熊を鴨居の處の棚にほんにちよつと置いて則に立つた。

濟む間が待てなかつた先生は間の襖ももどかしく閉め切つた拍子に借家建ての部屋全體に大きなショックを與へた。

素よりほんのちよつと置いてあつたとはいへ、熊はどうしたはづみか鴨居の棚の上から堅い堅い溫突目がけて眞つ逆樣に身を投げた熊は微塵に碎けた。

× × ×

『あの時の主人の顏色ッたらほんとに見て居て氣の毒で堪らない位でしたよ』

と奥さんが云はれたので其時の御想像が出來ましょう。

× × ×

それから間もなく樂浪古墳の密堀取締が嚴重になつた、犯人が上げられた。

Mの玉豚も一貫堂主人の熊二匹も共に臟品と云ふ汚名のものに其筋に押收せられた。

けれども先生の熊は！先生の熊は！。

そんな憂目は見なかつた。

遠の昔に玉碎して居たからであります。

（一四、七、八）

◈卓上小閑

石川利夫

東拓の尾崎さん、流石に歌や文章の骨法は、よく知つて居られる▲この間も、お忙しからうと思つて、原稿をお願しかねて居ますといふと、イヤ文章や歌は忙中によく出來るものだよ、自分等の經驗からいふと、溫泉とか避暑地とかさういつたヒマな處へ行くと、すつかり無精になつて、筆などは執る氣になれない……▲この名論には記者すつかり感心し、あの人は全く文人だとさう思つて居る。

東京雜記

苑南洞寓居にて　前田昇

○

昨日のやうに思つた關東の大震災も早や二年の過去となつた、此の間に僕は丁度二度東京の土を踏んだ、第一回は今年の正月で、最近はこの春の四月であつた。

○

震災後の東京で著しく目に付く事は交通の繁劇を増した一事であらふ、第一に自動車の交通が莫迦に殖へた、何でも二萬臺に近いやうだ、其他に從來の乘合と市の圓太郎が間斷なく飛んで居る、京橋日本橋の大通りの如きは勿論だが丸の内の濠端でも殆ど一時も自動車の絶へ間がない、其の中を例の鈴生りの電車は言はずもがな、オートバイ、自轉車と夫は〳〵目まぐるしい事此上もない、此に至つて始めて眞に交通整理の必要を痛感する、今や目拔の場所は巡査二名でやつて居るが、傍の見る目も氣の毒のやうである、夫でも自然の訓練で割合に事故は少いやうだが、折々各種の事故を見る、現に僕も自動車で自轉車乘りを一人ころがした、實に已むを得ないから乘るやうなものゝ、決して好んで乘りたいものではない。

二人の巡査が四六時中恰も器械人形のそれの如く兩手を振つて居る、あの光景と京城の市中の餘り交通の劇しくない所の交通勤務の査公とを比較して見る時に、これは又餘りに氣の毒のやうな、そして莫迦〳〵しいやうな感じがする使はれ人となると誰も成るべく樂である事を好むが、過ぎては却て忙しい人が羨ましいやうな氣もする。

○

三越を始め松坂、白木、さては松屋と云つたやうな所謂百貨店の繁昌は益々素晴しいものがある、一月の極寒時空つ風のビューッと吹く寒い日でも、ドシヤ降りの雨の日でも、何日も押すな〳〵の光景を見る度に、能くもこれ丈の人が出たものだと思はせられる、そうして是等の人の多くは若干かの買物をして居る、唯見物ではない此の繁昌は確に震災前よりは盛んになつたと思ふ、食堂などもホンの朝の間を除いては常に滿員である、能くも喰ひ、能くも買ふものだ、此處には全く不景氣の風は吹かないやうに見へる……實際は解らないが……併し去年の暮の押し詰つた廿八九日頃、三越一日の賣上げ實に五十四萬圓と聞いては、不景氣の存在を疑はざるを得ないではないか。

各百貨店の食堂を仔細に比較したら種々長短や特色があらふと思つたが、何分そこまで研究の時間を持たなかつた、が概して品質を選んで量を減じ、單價を引き下げたのは悧巧なやり方だと思つた。

百貨店の繁昌は第一に一ヶ所で思ふ品物が調へ得る事や普通商店の店先きよりも買ひ易い事……信用上の事は勿論……其他種々の原因もあらふが、昨今の實況から見ると電車や乘合自動車の如き安價な交通機關を利用して郊外の連中迄心安く出懸け得て見る丈けでも氣持のよい目の保養をし……時には氣持の惡くなる場合もあらふが……云はゞ遊びながら買ひ物でもして好いた物でも喰つて來る確かに一日の娯樂と見る事が出來る……殊に婦人の爲めに……こうした意味から猫も杓子も出懸けるのではあるまいか、例の銀ブラ黨には正に恰好の娯樂場とも云へるであらう、こう見た時にデパートメントストーアの繁昌を見て購買力がどうの景氣がどうのと云ふ事は出來ない、百貨店の賣れ行きがよければ夫れだけ他の普通商店殊に小なる商店の賣れ行きは減じて居ると見るのが至當ではあるまいか。

○

震災後の一ッの新現象として、飲食店が凡べて頗るお手輕簡便式となつた、多くは腰掛式で眞に口腹を滿たす丈けの組織となつたのは、時代の要求もあらふが、震災後營業者の建築物簡易と云ふ御都合主義が一ように此風を速成せしめたと見るべきであらふ、醬油樽に矢大臣を極め込んだ昔の繩暖簾其儘で、モーニングの紳士平然として丼を擁する所、明かに時代相が覿取出來る、併しお手輕事一は勢ひ實質に波及し、竹葉や橋善なども昔日の好味はない、尤も値と

る、あの光景と京城の市中の餘り、たら種々長短や特色があらふと思ども昔日の好味はない、尤も値と

京城雜筆

の相談だと云はれゝばそれまでゝある、更角安價を競ふ結果は己むを得ないが、魚河岸の名物も今や漸く平凡化した、この中に依然として家臺店の暖簾下で眞の立ち喰ひに常連を引き附けて居るものに新橋驛前の新富壽司がある、不相變自慢の鮪と赤貝を呼びものとして、今でも一個十五錢乃至廿五錢で押し通して居るのは聊か痛快の感がある。

○

不景氣の徵象には各店競つて廉賣、特賣、大賣出し、見切り等各種名目の下に客の吸收策を講じて居る、甚しきは正札の半價と云ふのがあつた、こうなると鳥渡氣味が惡くなるが、店先きは押すな押すなの騷ぎである、廉い……實質を問はず價格の上の……もので驚かされたのは三十錢のネクタイ、五十錢の半襟、一皿八錢の洋食などがある、さすがに實質を試めす勇氣はなかつた。

○

歌舞伎座を覗く、輪奐の美正に一驚に値す、全く奢澤に出來て居る、楷上楷下の諸通路の幅の廣いのは確に氣持がよい、帝劇の洋風に對抗的に此座は純日本式で……前の建築も左樣であつたが……凡ての手摺りを擬寶珠附ぎの勾欄にして居る、特等座席の分……舊棧敷と唱へた所……に一間毎に化粧可なり思ひ切つた遣り方だ、併し舞臺の幅の餘り廣きに過ぎ側面の席からは甚だ見惡くなつた、口跡の通りも良くない、要するに少々廣過ぎる感がある。

小屋は前記の如く全く奢澤であり、背景は贅入念となり、俳優は高い給金の一流處の頭を揃へ、衣裳、小道具は殆ど贅の限りを盡くす、特等十圓の觀劇料は決して高くない、否僕は正に廉いと思つた併し無理に金を懸けて居る傾きがある、丁度朝鮮の田舍で土地一流の宿屋が羽二重や縮緬の夜具を著せ、喰べもせぬ膳部の物數多く並べ、而して無理に宿料を高價にし又茶代の多きを希ふと一般である一例を擧げると舞臺に顯はれる仕出しの如き、五、七人で濟む處を廿人も出し、而も其衣裳の如き夫々小奇麗なものを着せて居る、正に費用は懸かる、特權階級の娯樂機關として此位のものも一ヶ所位は帝都に必要かも知れぬが、結果觀る方も觀せる方も共に引き合はない、置いて合はず居て合はずと云ふ食客と同じ結果に陷らざれば幸ひである、但し斷つて置くが第一回コケラ落しの時も、この四月の興業も連日滿員で、良い場所は數日前に買はないと取れないと云ふ盛況で、イソ的結果など以ての外との事で御座る。

序に帝劇も鳥渡拜見した、木挽町を見た眼には俄かに小屋が小さくなり、凡べてウス汚くなつた感がした、勿體なし〳〵、始めて帝劇を見た時には、正にオツ魂げた一人の癖に、是れだから困ると自ら深く戒めて玄冶店の松助の蝙蝠安と云ふ天下の逸品に溜飲を下げた、胃散の遠く及ぶ所にあらずだ此座の前を僕は毎日のやうに通つたが、二時頃から見物が入口前に二列側面縱隊で、正しく並んで待つて居る者實に百人餘り、驚く勿れ開場は四時だ、正に二時間の直立不動、さても熱心なものとホトホト感じ入つた。

歌帝兩劇場は先づ以て特權階級の專有として、是に對抗的に民衆劇場と銘打つて極めて安價に面白く見せる座がある、淺草座、宮戸座、神田劇場等が夫れである、是等と雖も決して馬鹿にはならない現に當時淺草座には左團次が大奮闘をして居た、京劇で八圓の高舶屋でも此處では三圓程で立派に見られるのだ（以下次號）。

◈東西南北集

平田久雄

六月の末、前田少將を苑南洞のお住ゐに訪ふ、立派なお邸である、殊にお庭がいゝ、珍らしい樹木や石が、ウント配置されてある▲析柄主人公は、お閑であつたと見え庭つくり姿で、鍬を持つて、せッせと樹木の手入をして居られる▲人間、するだけの仕事を仕つくしたら、宜しく斯うした閑、淨潔の生活に入るべしだと、記者はしみ〳〵さう思つた▲細井肇氏の原稿の中に、追分と大津繪のことが一寸見えて居る▲處で、それが大津繪であるか米山であるか、當の細井氏も、本社町人氏も、ふたり乍らわからず、いくら相談しても駄目――とう〳〵さる粹者に聽いて『ナーンだ、大津繪ちやないか』と笑はれ、兩人頭をかいて『どうもこの種の問題は、我々には不向だテ』▲鎭南浦の川添種一郎氏キツパリと、小氣味よく、商議會頭をことわつて了つた▲それで、今年は少しは閑も出來たし、お得意のテニスや、野球、ボートレースで、一夏を送られる計畫らしい▲商工會社の若い連中喜ぶ〳〵。

高麗燒の話

京城富田商會　富田儀作

九

古い燒物の價値あるものが、大概新羅若しくは其後の李朝の初め頃に出來たものであると前に申しましたが、然らば何が故に此の朝鮮から出來たものゝみに斯うした値打のあるものが多いかと申しますと、それは全く其國の國民性から來るものではなからうかと私は考へるのであります。

何人も知る如く、此の朝鮮は昔から日本と支那の間に挾まれ絕えず東西から壓迫を受けた。事ある毎に東からは日本の强勢力で以て押し寄せるし、西の大國支那は不斷に朝鮮の國內に入り込んで、常に屬國扱ひにして止まない、出やうにも出られず、國の威力といふものは更にない。從つてその國民の如きは兩國民の不斷な壓迫から逃れることが出來ず、遂に山の中にでも隱遯し、心あるものは自然を友とし煙霞風月を樂しんでその餘生を送つたやうな者が決して少くなかつたのであります。

十

ところが此等の隱遯者は、世の中の總ての富貴榮達を忘れて只管自然を友として其日を送るのに、何時しか無聊を感じ出しそれが不圖した動機から燒物を作る事に手を染め出したのであるが、一度手を出し初めるとそれは却々面白くて止められるものでない。次第にそれに興味を覺え出して來ると、今度はどんなものが出來るだらう次に燒けたものゝ色は如何なる變化を現はすだらう、といつた風に全く他事は省みず、燒物の事ばかりを考へて無念無想の境地に入るといつた風になり、而もその出來上つたものを賣つて其日〳〵の生活に事足りさへすれば決して外に慾心はない。全然趣味の裡に生活を繰り返すばかりで、良い物、良い品を造り出す事のみに專念した關係から、遂に今日見る如き實に立派な珍しい價値のあるものを作り出すやうになつたのであります。即ち藝術家が、社會を忘れ、身を忘れ、その生活さへも忘れて只管その藝術の爲にのみ生きると同樣の意味で、斯くの如くして出來上つたものが、所謂精神美の籠つた雅味のある作物となつて現はれ今日から之を見れば如何に安値に踏むとしても茶碗一個で五萬圓も七萬圓もする程の價値を生ずるやうなのが製作されたのであらうと私は思ふのであります。

十一

曾て私はこんな事を聞いた事があります。アメリカのシカゴ博物館の何とかいふ專門の博士が、東洋の燒物を評した言葉に『支那は形、日本は色、朝鮮は線を現はしており、その何れも明かに燒物を通してその國の國民性を如實に物語つて居る』と、私は此の言を聞いて實に穿ち得た批評だと感心いたしました。なるほど左樣に云へば本當によく當つて居ます。全く一言ありません。即ち朝鮮の燒物は線から成立つたもので、その線の中に何ともいふ事の出來ぬ歷史的な悲哀が籠つて居るやうに見えます。即ち好事家に云はせると、朝鮮といふ國は、燒物を通じてその國の歷史が知れると云へるやうな氣持がしてなりません。とにかく朝鮮の古いものは斯くの如く立派な物が少くないのであります。

ところで私共がやつて居ります燒物は斯うした見地からして出來るだけ良い物を作り出さうと心得絕えず苦心をして居るのでありますが、いざ實際に當つて見ますと却々思つたやうなのが出來上りません。けれども研究に研究を重ね何とかして滿足するに近いものをと考へて居るのであります。勿論一朝一夕にして値打のある品が出來上るやうな事は夢想も出來ぬ事であると同時に、私をして謂はしめるならば、燒物を作つて生活しやう、或は大に一つ儲けてやらう等といふ考へから初め出したりする人が若しあるとするならば夫れは非常な心得違ひであつて、燒物といふものは決してそんな心持で出來るものではない、つまり精神美の籠つたものを作り出す考へで生活とか利益とか云つたやうなことは度外視し、全く趣味の爲めに或は燒物の爲めに燒物を作るといふ境地から出發しなければ迚もその目的に達し難いと私は考へるのであります（終）

考へて二三日寢る事に決心をした

瘤取り日記

太平町假寓にて　田村直一

二三年前から右耳の下に豆粒大の瘤が出來て居ましたが別に邪魔にもならず痛いこともないので打ち遣つて置いたが、最近其瘤がメキメキ發達して梅干大になり、其上チク〳〵痛みを感じて來た。

友人の誰彼れに相談をすると、ナーニ君、瘤が出來れば金が出來ると云ふから緣喜だよと云つて取り合はない、然しどう考へて見ても金は出來そうにもないのに瘤の奴遠慮なしに大きくなつて來る。

斯うしては置けぬ、一と思ひに退治て終はなくては……漸く決心の臍を固めて近所の禰戸病院に飛び込んだのは六月十五日の午後四時であつた。

『先生此瘤を何とか』『ヤア譯はないです、一寸お待ち下さい、縫ふ準備をして置きますから』サテ縫ふと聞いては可なり大きく切るのだなと直覺した、何となしに痛さが思ひやられる、けれども今更ら逃げ出す譯にも行かず心配して居る中に手術室へ導かれた。

『ドーゾ、裸かにおなり下さい血液が著きますから』

愈々助からんと覺悟を決めて臺の上に臥た、先生曰く『注射が一寸痛いかも知れませんよ』僕は此の一言でホツとした。

耳元でガシ〳〵妙な音がしだした、『どうです、氣持ちが悪いでせふ』『イヤ痛くないから何んともありません』こんな話の中に手術は終つて幾針か縫ひ合されたのでした。

『サア、濟みました、繃帶をかけますよ』『エ、どうぞ』『二三日すれば繃帶はとつて終ひますからね』私は傍の鏡を見て驚いた、漸く顏の一部が出て居るだけで、まるで一弁德利を風呂敷に包んだやうにしてある。これで先生が態々繃帶をかけると斷はつたのだなと思つた、ブラ〳〵歩いて歸る途中、府廳の前で口悪のT君に出會つた。

『イヨウ、やつちよるな　どうしたい其頭は』『どうもしないさ』『殴られたかい君』『馬鹿云へえ』『フ、ンるいれきかい』『クソツ』『おかしいじやあないかへントウセンかね』『生意氣云ふない』『いつたいどうしたと云ふんだい』『耳の治療さ』

なあんだつまらないマア用心し給へ、難有うと云つて分れた、其翌日病院から歸り途、雜筆社に立ち寄つた、松本先生一見して曰く『ホ、ウそれじやあ、どう見てもビール瓶で撲り合ひでもやつたと云ふ格好だね』。

又しても此の一言、然し簡單にして蓋し適評であると思つた。

これじや、ウカ〳〵出て歩るくと此の繃帶あるが故に自已の人格を傷つける、と云ふやうなことを考へて二三日寢る事に決心をした自分が臥て居ると云ふ事を聞き傳へてポツ〳〵見舞に來て呉れる友人達が申し合せたやうに私の顏を見るや否や『ヤ、どうしたんだい、いつたい、その頭は』と云ふいつたいその頭とは何んだい。

親の敵でも討ちそこねたとでも云ふところかね。

バカツ撲られでもしたかと云ふ謎だらう違ふよ君、これはね、斯う云ふ譯なんだ、と一々辯明する事三日間。

四日目の朝繃帶がとれたのでヤツト一安神、耳の下も輕くなつて氣分が清々して來ました。

◈頬杖ついて

石川利夫

或るお役人さんにお目にかゝる、素ッ氣なきこと、高野豆腐を、そのまゝ嚙るに似たり▲そのあとで殖銀野田さんに面會する▲すると野田さんのいはれることが面白い『芝居でも良い役者は、みんなド男とか女中とかをする、ヘタな役者に限つて、殿様ぢや、〇〇とか△△とかいふお役人は、先づその殿様――と斯う思つて居れば腹が立たぬ、威張るのが役德だからね大目に見てやるんですね』――ナールほどと感心した▲京城府の人事相談所には、不思議に文筆の士がそろつて居る▲しかもそれが悉く岡山縣人とは實に妙だ▲その中で、早田鑛泉氏は昨年も何とかいふ著書を刊行したが、最近は『京城近郊案内』といふ氣の利いたものを出版した▲兎に角アスコの御連中は、揃ひも揃つて役人臭を脫け出して居る。

有賀西崎兩雄 碁戰傍觀記

朝鮮鑛業會 德野眞士

京城雜筆

御兩人共、碁に於ては素人初段の腕前があるといふのだから、敢て兩雄と云つても過褒ではあるまい。しかも何れ劣らぬ碁狂の部類で、其の氣樂に富み覇氣に充ちた碁風からして、似たりや似たり何と云ひたい位である。碁でも將棋でも少し上手になると、いやに考へ込んで蕣呂木六段の所謂敵の手を樂しむといふ境地に到達するさうであるが、兩雄は初段格の技倆を有し乍ら、パチ〳〵と投石する事の早さは、初段に井目の笑嘲と少しも變りはない、見て居て面白い事天下一品である。或は傍觀役の吾輩の爲めに戰つて居るのかも知れぬ。何日だつたか西崎氏が、『どうも君が居る時はいつも僕が惡るい』といふから、『それでは今晩は失禮しませうか』と云へば『いやそれはいけぬよ』と有賀氏も共に抗議を申込んで來る。此處に到ると、吾輩も兩雄の碁戰には なくてならぬ必要な立會者の地位に在るのである。

×

總督府の廊下などで有賀頭取に出會すと、『西崎君は來ぬかい』何日何處で會つても根氣よく同じ事を繰り返す、少しは他の事も言ひさうなものだが、何か要件を拵へて頭取室に罷出ぬ限りは、頑として『西崎君』以外の事は言はぬ一方又西崎氏が京城に來る、それは何か來ねばならぬ要務があつて來るのである。浦尾の二階で吾輩の顏を見ると『今晩はどうだらうかネ』『宴會じやないでせうか』無論有賀氏の事を言つて居るのである。そこで電話をかけると『今晩は宴會か二つあるが九時には濟みますよ』との熱心さである。それでは吾々も九時頃迄何處かで飲まうと來る。碁の傍觀は兎に角、酒の傍觀は余りぞつとせぬ。雜筆の松本さんを呼びませう、誰れも來て貰ひませうと、二三の人を召集して、飲む人は飲めと吾輩はいつも女でも相手にして喰ふ一方である。

×

酒席で話題の多いのは西崎氏である。古今東西の逸話が次ぎから次ぎへと繰り出されて、滾々として盡くる處を知らぬ。其處に行くと有賀氏は問題にならぬ、自分で面白くなる程の酒はのめず、女には沒趣味、校書に冗談の一口も言はぬと云ふ野暮天である。あれでよく銀行屋がつとまると思はれる位である。碁以外には何一つ一致した點を見出さぬ兩雄も、碁となれば恐ろしく向ふゆきの荒い積極的な打ち方が全然歩調を一にして居る。初めから火花を散らして戰ふのである。初めて見物した某氏曰く『こりや驚いた、私は兩軍肅々として相對峙し、旌旗容易に動かずと云ふ中に、息づまるやうな緊張味を見せるだらうと思つたらこれではまるつきり角力のしよつきりみたやうですね』と。以て知るべしである。

×

碁以外には、勾玉蒐集位で、時間のかゝる道樂は何一つ持つて居らぬ有賀氏は、恐らく碁を打たぬ日はあるまいと思はれる位である丈けの腕前で、吾黨程度のヘボをも相手に歡迎する。碁は精神許りじやない肉體の運動にもなるよ、處世の秘術も外交も戰爭も碁に據りて學び得るよと、自己一流の哲論を信條として、どうかと云へば碁に淫する方であるが、それでも『誰と打つのが一番面白いですか』と訊けば言下に『西崎君』と答へる。

×

小說のやうだが話は二十年許り溯る。平壤と鎭南浦の間には無論鐵道はない時代である。有賀氏は絕海の孤島にでも流されるやうな氣分で、馴れぬ朝鮮馬に乘つて平壤から鎭南浦に行つて居つた。すると一臺の轎が後になり先きになりして同じ路を同じ方向に行つて居る。大同江には大きな氷が流れて居る時で、外に誰一人通らぬ田舍路のもの淋しさに、話でもしたいが轎の人は男か女か鮮人か內地人かさへ分らぬ。其の內に江西の邑內に著いて、とある茶店に立ち寄ると、轎の人も亦其處に居た。

それが西崎氏で、有賀氏は鎭南浦『碁は仁川に限るよ』と西崎氏意ちや駄目ですよ』と云へば有賀氏

京城雜筆

それが西崎氏で、有賀氏は鎭南浦稅關長として赴任の途中にあつたのである。有賀氏は其翌日早速昨日初めて會つた唯一人の知人西崎氏を訪問して一石やつた。こんな因緣で『吾輩の爲めには朝鮮に於ける最初の碁敵だからネ』と有賀氏は如何にも感慨に堪へぬ口吻である。冷やかなる事氷の如く見ゆる有賀氏にも、其の胸奥には豐かな情緒と感傷的な血とが流れて居るのである。

×

爾來二十年、勝敗は兵家の常でお互に白となり黑となりして來た過去の戰跡から云ふと、西崎氏は常に優位に居つた、向ふ先は久しい間維持して、『まあ先二かネ』と言ひたい位の時代もあつたが、有賀氏の進境が近年めき〳〵と眼に見へて來て、今では向ふ先など言ひ切る自信は勿論ない、どうかすると壓迫せられ勝ちで、今春などは殆んど有賀氏常白の觀を呈して居つたが、昨今は又盛り返して居る。

×

兩雄時日を約して相會するや、挨拶や世間話は一切拔きにして直ちに盤面に向ふ。何か話せばそれは次ぎの會戰日の打合せである。吾輩の傍觀役をつとむる場所は、浦邸か有賀氏邸であるが、何しろ双方共ド手な笊黨に劣らぬ位の早さだから、一夜にして戰況が一變する事は珍としない。今年の二月には有賀氏常白であつたが、二十七日の夜に互先となつて兩雄は東上した。駿河臺の龍名館に落ち合つて有賀氏再び優勢であつたが、四月には歸つて二十五日港灣協會の爲め仁川に行つて、有賀氏九面連敗の悲運に際會して常先となり『碁は仁川に限るよ』と西崎氏意氣揚々たりしが、二十六日の夜には互先となつて、常勝將軍の名も槿花一朝の夢に過ぎなかつた。

×

西崎氏があの偉大な體軀でどつしり坐つて居る處は、實に威風堂々として邊りを拂ふの觀がある。有賀氏は敢て長軀肥大な體格ではないが、全身に精悍の氣が溢れて隼の如き鋭さを持つて居る。『こりやまるで夢中で打ちましたよ』『いやこちらもですよ』と互に熟し來る頃になると、西崎氏の一投石は盤全體の石が震ふて、どしんと地響きがするやうである。それに有賀氏のパチンと澄み切つた石の音が、鋭く物凄いやうに聞へて來る。勝敗は此一擧にありといふ場面である。難局に遭遇すると有賀氏は、洋服の膝を合せて一寸心持ち斜に端坐し、無意識に煙草をとつて口に持つて行く、時には火のついて居らぬ事もあるが、それでもお構ひなしに盤面を眺めて、『サア いかん、喜んでるなー』と考へるでもなし考へぬでもないやうな風をして居るが、其の間に恐ろしく先きの手まで讀んで、敵をアッと言はしむるやうな名手を出すのである。形勢が一變すると、『どうだ手があるだらう』と、火鉢を挾んだ向ふ側に居る吾輩の肩をぽん〳〵と叩く。之れが得意の絕頂である。

×

勝敗を比較的色に出すのは西崎氏である。少し景氣かよいと、酒席などでは曾て出した事のない唄か浪花節が飛び出して來る。有賀氏が『これは實に面白い』と云へば『面白ろ浬の腹鼓ポン〳〵』と應ずる。吾輩が傍から『あれが出ちや駄目ですよ』と云へば有賀氏は『あれが出ちや駄目だネ』と云ふ。双方可成り文句は多いが、有賀氏は減多に創意の警句は吐かぬ多くは敵の言葉を其儘應用して濟まして居る。西崎氏は『千里を遠しとせず碁敵をもとめて來り、これでは仕樣がないですネ』とか又は『さに非ず、名手を打たれる、智者だからなー』と、上半分を文章でやる場合が多い。しかも双方最もよく出る言葉は、有賀氏は西崎氏を指して『強よいからなー、打ち手だからなー』と云ひ、西崎氏は有賀氏を『智者だからなー』と云ふ言葉である。

×

有賀氏の碁は不思議に上を這ふ碁である。そうして勝つて居てもとれさうな石があればいくらでも取り盡す主義である。其爲めに大なる失敗を招く事があると、判つて居るのだがどうも之れが僕の病だ、又病が出たなーと嘆聲を發する。從つて負けて居る時でもなか〳〵投げぬ。西崎氏は敗けると段々熟して何驚ツと云ふ氣慨が愈々強くなり、益々負ける方であるがどの碁も最初から正眼に構へて、一擧に勝敗を決せんとするの風が見へる。從つて戰利あらずと見れば案外早く投げる。こんな碁は時間の妨げするよと、捲土重來を策する。有賀氏は敗けても平氣に見へるが、それでも『われ少しく冷靜を缺くか』と言ふ所を見ると、心中では多少熟して居ると見へる最近の戰況は六月十八、十九、二十日の三晩に、互先で四十五面戰つて打分けである。兩雄の力が如何に伯仲して居るかは之れで知る事が出來やう。そうして一夜平均十五面といふ早さ加減も——。

續馬來雜話

―土人と結婚奇習―

總督府燃料研究所　市村毅

○

田舍の馬來人の結婚には今日でも面白い習慣が殘つて居る、即ち或る男が嫁を貰ふためにはそれを物品の樣に買ひ求めねばならぬ、勿論お嫁さんの顏の美醜により値段の高低があるけれども、大抵五十圓から百圓位迄を呈供すゝ相である、女で早いのは十三四才から結婚し、それも自分より身分の低いものとは全然結婚することが出來ぬ樣になつて居る、愈それと定まると、最初出迎への意味で男の方から嫁の家に乘り込み、そこで數日間同棲した後女の方から正式に興入れして、こゝに始めて結婚が成立するのである、然し甚しく男尊女卑である、此國では多妻主義で、四人迄は妻帶することを許され、假令結婚した後であつても若しお嫁さんが氣に入らねば神に對して誤れる婚姻をしたとの理由のもとに、何時でも直ぐ是を離婚することが出來る、だから試みに相當の年配者に向つて妻を何人位替へたかと問ふならば、或る者は三人、或る者は五人などゝ臆面も無く返答する連中が少くないであらう、是に反して妻の方で夫から離れ樣とするならば、結婚前に夫から受け取つた身の代金の倍額を返還し、其後百日を經ねば再び他の男と結婚することが出來ぬとか言はれて居る、男の方で結婚後逃げ出したりして滿二ヶ年を其まゝ經過した時には裁判所へ屆け出るだけで夫に對する離婚が成立し、百日後に他の男と夫婦になることが出來るが、若し其前に男が戻つて來て復緣を迫り女の方で是を拒絕すると、その女は最早一生他の男と結婚することを許されぬ、斯うした事情のために三十年間も淋しい寡婦生活を續けて居るものがあるとか聞いた、馬來人は結婚期に近づくと奇拔な洗禮を受けることになつて居るが、馬來人が見た異種族が馬來人と結婚する時にも必ず馬來寺院で此洗禮をして貰はねばならぬ、此形式をマツマラユ（馬來人になる）と言ひ、洗禮が終つた後はアワンとか何とかの馬來名をつけられると共に、今迄トワン（旦那）と呼ばれたものが友人呼ばりをされる樣になるのである。

○

土人は一般にモハメット教を信じ、是に渾身の信仰を捧げて居るために、その生活の全面は殆んど宗教に支配されて居ると言ふても好い位である、だから上下を通じ幾度かメッカに參拜するのを男子一生の最大希望又は一大榮譽と考へて居る、然し中には僅か四五百弗の旅費が無く、絕えずメッカ詣を夢みながら一生を終る者も少くない、メッカに參拜する場合には大概數十名の團體で巡禮の旅をなし、船中でも陸上でも一切他人の手を煩はして食事することを禁じ各自苦行を續けてメッカの禮拜堂へ行くのである、その時には先づ附近の泉で數日間齋戒沐浴をするが、若し此間に雨に遭つたものは積惡の酬ひが神の忌憚に觸れたものとして禮拜するの資格を失つて終ふ、そこで此期間を首尾好く經過した者許りが禮拜してハジと言ふ尊稱を授かり、歸國後は此尊稱のために通常ハジでない者の上席にあつて特別の尊敬と優遇とを受ける樣になる相である、勿論どんな者でも宗教の禁を破るのは人生最大の罪惡と考へ、就中豚類を喰べたり、酒を飲んだりすることを嚴禁して居る、唯外人と深く交際して居るものゝ中には稀にウヰスキーとかブランデーの類を呷る者もあるが、是とて同族の眼に觸るゝ場所ではやらぬ、然しビールは酒で無いと言ふて時々平氣で飲んで居るものがあり、側からも別段それを怪しもうとせぬから滑稽の至りである、此中でも馬來人が宗教的觀念から豚類を嫌がる點に就ては奇拔なエピソードを在馬來半島の友人から聞いた、何でも同君が或る日他から貰つた日本人製羊羹を恰度遊びに來て居た王族と自分の小使に與へた處が、二人共始めは妙に不審がつて、其製造原料を充分に確めぬ内は如何しても口に入れなかつた相である、そしてそれを喰べ終つた後小使がふと惡戲氣を起し、わざ〳〵裏手で口を注いで來て、先刻喰べた羊羹中には豚の脂が雜つて居たと言ふや否や王族は直ぐ嘔吐を催し、又ほ[illegible]五分間以上祈禱するのを普通とし[illegible]

『イヤそうじゃない、なんぼで

は豚の脂が雜つて居たと言ふや否や王族は直ぐ樣嘔吐を催して大に苦悶したと言ふことであるが、是を見てもムハメツト教徒の神經が如何に根强く宗教的習性に支配されて居るかゞ解るであらう、その信仰の方法としては毎日午前、正午、夜の三回に場所の何たるかを問はず必ず口を注ぎ、手を洗つて五分間以上祈禱するのを普通として居る、又毎年ムハメツト紀元の年末になれば四十日間仕事を休みそのときには晝間は絶食して煙草を呑まず、午後六時に打ち出さる鐘を合圖に淸食をとつて、更に夜十二時頃に一回小食をなし、神に對して一年間の謝恩の苦業をして居る樣に見受ける。

『イヤそうじやない、なんぼでもあるにはあるが』

『じや私がいつてつけてやりませう、どこにありますか』

『あすこにあるよ』

『あすこといひますと藥局じやないのですな』

『ウム藥局じやない炊事場だ』

『炊事場に！一體炊事場の何處にありますか』

『あすこの水道の水が其だよ』

看護人は水と聞いてどうしても腑におちぬらしい顏付をして

『ヘエ！水道の水、水道の水ですか』

◈茶を啜りて

吉田莊一

山縣悌三郎先生、今は靜に竹添町の僑居に、晩年を送つて居られる▲が、この人は、わが出版界にとつては、永遠に忘れられない人……そして斯界の大恩人でもある▲少年園、靑年文、文庫といへば、日本の月刊雜誌の先驅——濫觴である▲そして、先生は內外出版協會のその創立者であられた▲それから明治十年代に通信教授——今の講義錄といふものを、日本で初て試みられた人でもある▲英國風な稀に見る立派な方である▲前の京城日日編輯局長蒲生隆宏君、今は大連で大陸といふ雜誌を主幹して居る▲五月の末頃京城に來た時釋尾氏を引つ張り廻して、數々飲んだ擧句、今度は私がいゝ處へ御案內しますとて、明治町の某カフエーに連行、いゝ加減昔馴染と喋々喃々した上、またもお拂ひはそちらでよろしくと來たので、流石の釋尾氏『どうもきやつには敵はないネ』

代診

京城佛教慈濟會　小水眞二

哀號！哀號！

或る月曜日の午後の出來事であつた。午睡の夢を破る、仰々しい苦悶の聲が、施療の病舍から聞えて來るから行つて見ると、鄭氏といふ七十ばかりの一人の鮮人の老婆が、膝をかゝへて眼から大粒の涙を出して泣いて居る。

同室の者の話では、膝が痛むから藥をつけてくれつて泣いて居るのだ、といふ事が分つたが、折惡しく誰も見當らない、患部を見ると、イチオールを塗つた跡があるので、早速藥局へ來て搜したが、どうしても見當らないから、やむなく水瓶を手にして彼の病室へいつた。

『サア、こちらへ來なさい』

老婆は足をひきづり乍ら、漸く廊下へ匍ふて出て來たが、搜せこけた足は、枯木のようである、彼は膝をさすりながら溫順しく、自分の前に足をさしだした。

『ジヤ、つけるよ、コノ藥は大變よくきく藥だから、暫くジツトして居ると、痛みはとまるからな、そんな大きな聲で泣いちやいかんよ』

何回も筆を濕して、患部へ塗つてやつた所が、ものゝ二十分もたつと、今迄の苦しみを忘れたかの如く『有難う』を繰返へして、病室へはいつていつた。

其事があつてから、二三日して看護人が、自分の所へ來て

『七號室の鄭といふ婆さんが、このあいだの藥をつけてくれつて、きゝませんがどうしたらいいでせうか』

『ナニ此間の藥をくれつてソリヤ困つたな』

『藥がなくなりましたか』

在する事が記されてあるが溫泉場としては餘り古き歴史を有しない樣である。

× × ×

以上はホンの一部の古書に記載せられて居る事項を摘記した迄であつて是れが溫泉史の全部でないことは勿論である。詳しき歴史上の事實は其の方の專門家に讓る事として更に稿を改めて私自身の調査研究を土臺として朝鮮著名の溫泉を交通、遊覽、泉量、泉質、泉溫、ラヂウム、エマナチオン、設備其の他總ての點から觀察して品騰して見る事にする。

朝鮮の溫泉

總督府地質調査所　駒田亥久雄

溫井里と朱乙

溫井里溫泉の所在地は往時から江原道高城郡の管内にあつたが今は杆城郡に屬して居る。而して金剛山探勝者の一度は必ず足を留む可き外金剛の域内に位し、長箭港より約三里南方の萬物相を經て内金剛に到る關門に在りて水晶峯、觀音峯が直ぐ其の西方に聳えて居る位だから風物の變化著しく遊覽探勝の個所に富める點に於ては正に天下一品と稱しても過言であるまいと思ふ。

東國輿地勝覽に左の記事がある

在郡西北三十二里。世祖十二年巡幸關東。駐駕于此。

依て考ふるに溫泉場としては可なり古くから知られて居たものと思はれる。殊に李王の駐駕せられた點から察するに勿論浴場としての設備の存在したものと思はれる

現在は溫井里ホテルを初め日本旅館多數あり設備亦敢て不完全とは稱し難いが溫度と湧出量とが不足勝で場所柄丈けに冬季の往訪に漏しないのは遺憾である。

朱乙溫泉は咸鏡北道鏡城郡内に在りて咸北線朱乙驛から三里上流の幽邃の境に位して居る。溫度の高き事と湧出量の大なる事とで有名であるが其の地餘りに僻の嫌ありて從つて利用も單に一地方に限られて居る。旅館の設備其の他も完全とは稱し難いが咸境線の開通により面目を一新する事であらう。兎に角溫泉としては北鮮の雄である。

東國輿地勝覽中には鏡城都護府の西三十四里の地に錐峰溫泉の存

朝鮮雜詠

笠原要太郎

虎

多の月さやかに照すいは山のあたりに吼ゆる大とらのこえ

鵲

巧にも牛を使ひて鋤きおこすたの面にあさるかさゝぎの群

雁

霜ふかき朝の空にいづこまでなきて行くらむかりがねの群

鼈

浮草のはな咲く川の夕ぐれにはや釣り居れば鼈かゝる

唐辛

屋根の上に花か紅葉と見へつるはほしひろげたる唐辛なり

水汲女

水甕を頭に乘せて賤の女がいそぐすがたはをかしかりけり

米搗

眞直なる杵もて米を搗く人は月ぬけ出でしうさぎなるらむ

射的

風呂桶の蓋ほど圓き的立てゝとほくより射る弓は短し

書堂

大君の惠みあまねき今の世にからぶみのみを習ふかたくな

喫煙

道のべの牛のあとより丈長ききせるくはへて賤の男の行く

田植

鍾太鼓はやすうしろに居並びて田植する人もろはだをぬぐ

鳥追

あき來れば稻守る兒等の遠近にひねもす絶えぬ鳥おひのこえ

中から初まつて家族の者一同風邪

京城漫筆

總督院醫院　廣田康

○

私はこちらに參つてまだ日淺いと思つて居ました、ところが七月となり八月も近づいて來て私が參つてから早や滿一年になりかけました、京城に來て見て先づ驚いたのは舊知先輩の方々が割合に多いことでした、挨拶に出たら何だ君だつたのかと云つて呉れた人もありました、勿論無精な私がたよりもせず、突然やつて來たのを咎めもせず、ささくにもてなして呉れたのでした。

思はずて舊知の多し月の秋

○

前任地で苦んだ住居の問題もこちらでは殊に私にとつては何の心配もなく、著くとすぐ今の宅に住まはして貰ふことになりました、早やくも九月となつて眞にさわやかな秋といふ感じを味ふ朝となりました、門前を通る涼しい鈴の音が聞えて來ます、此國の人がよく牛を曳いて通るのですね。

新涼や牛ゆくと知る朝の鈴

○

こちらの國の人の風俗なり習慣なりほんとに珍らしく感じましたなる程一年になります、それがだん〳〵薄らいで來ます。

幼な子の爪尙ほ染めつ鳳仙花

○

十月の何日かに氷が張りました私の故郷も寒いがこんなに早く氷を見たことは無いと思ひます、寒さには驚きましたね、それに今迄暖い土地に慣れて居ましたから、夜など庭に出て見ると冷い風が吹きまくりよく磨ぎすました樣な月を仰ぐことでした。

苑前の道砥の如し多の月

○

ほんとの冬が來ました、寒さのことはくど〳〵と申しますまい、けれど家の中や勤先に居るうちはさ程にも感じない位です、それに勤先きのあたゝかい空氣は何よりです、種々の方からのおたよりがどんなにか私達の心を明かるくしましたらう。

春待や今にたよりす舞二人

○

どうやら二月までこぎつけました、こちらは冬でも空がよく晴れて一日あかるい日ざしのあるのが又となくうれしい氣分です、紀元節はとりわけいゝ日和でした。

咲きも得で少き梅に佳節かな

○

初めての冬で嘸困るだらうとよく慰められましたが中々元氣でした、ところが二月も末になる頃女中から初まつて家族の者一同風邪で枕をならべました、私が獨り殘つて看病するといふ始末、これには一寸弱りましたね。

病み洩れし枕の一つ春淺き

春寒や藥杯にする猪口の數

○

三月になつてから次第に樂になりました、ことに三寒四溫で凌ぎよいと思います、然し民俗性とは引き離すことが出來ないかに思はれる溫突はまだ〳〵焚かねばなりませんでした。

雪解風一疆の薪を買ふ日かな

○

四月の二十日頃から漸く花が咲き初めました、こちらでは櫻、榴連翹、桃などみんな殆ど一緒に咲きます、すぐ向ひの昌慶園の櫻は見事でした、中々雜鬧しましたね昔めいた言葉ですが花の下で一瓢を傾けてる人があり唄ふ人踊る人色々でした。

花のとき羨まれ住む埃かな

○

いつの間にか花が散つて目覺める樣な新綠の節になると、友人の罹病、教子であつた薄幸の歌人の死亡の通知で驚かされました。

花過ぎて底冷とほる三日ほど

○

こちらに居られる舊知先輩のうちには小學時代の先生もあり、中學での先生もあります、それに病院のS先生どちらを向いても頭があがりませんね。

相談る三昔の春まのあたり

○

先日は論文の別刷ありがとう、御禮にもなりませんが私のは不相變拙いから御叱正を願ひます。

恥かしき文殼落花拂はじな

（一四、七、一〇）

水甕を頭に乘せて賤の女がいそぐすがたはをかしかりけり

あき來れば稻守る兒等の遠近にひねもす絶えぬ鳥おひのこえ

京城雜筆

貧乏人の子

赤誠同志會本部　淺岡信堂

◇暑い〳〵と暑さを怖がり、海水浴や、山間生活と避暑騒ぎをやる弱虫連が、年一年と殖えて來る是が最良の健康法か、將た衞生法乎。

◇此方が弱くなれば、敵は益々つけ上る。此方が强ければ敵は自然に閉口垂れる。之が古今東西天下の定法だ。暑が來て暑さを恐れ冬が來て寒さに怖がる程の弱虫では話相手には出來ない。

◇國歩の艱難多事の今日に於てなど、小むつかしい事を言ふまでもなく、何時の時代でも弱虫ではいけない。强くならふぢやないか嚴寒には寒殺の工夫、炎暑には熱殺の力を出して。

◇私は貧乏人の家に生れた仕合せで、寒さや暑さに敗けては居られなかつた。十三歳の夏タッタ一圓の金で燒き付く樣な炎天を、岐阜縣の田舍から東京迄東海道筋を一直線に素足でテクつた。汽車はあつても、一圓の金では乘せて呉れぬから。

◇貧窮な親達に何時迄も厄介になつて居るのが衷心から堪へられなかつた。自分一人でも獨立自營したら、親達が助かるだらふと思つて、苦學を志して、夜陰私かに出奔したのであつた。

◇途中芋を喰つたり、眞爪を嚙つたり、生水を飲んだり、並木に寢たり、木賃宿の世話になつたり大雨の降り頻る箱根山、小篠や雜艸の爲に道も分らぬ難所をズブ濡れで通つたときは全く泣いてしまつた。親の難有味もこんなときに一層深く感じて來る。

◇知己も先輩も親類も持たぬ、知らぬ他國の東京に著いたのは、出發後十一日目で、明治廿三年國會が始めて生れた年だつた。芝の愛宕の社殿に寢たり、上野の寺門に夜を明かしたり、絶食の儘二日二晩東京の市をうろつき廻つた。

◇命と賴む二錢銅貨一個は、最後の最後迄守り本尊の樣に縞の財布の底に殘して居た。三日目の晩には飢と疲れとで最う動くことも嫌やになつて、路傍のゆでぁづき店で一杯五厘のゆでぁづきを二杯食つた。之で聊か元氣づいたものゝ、所有金は正に半減して、殘る所は金一錢也。

◇悲しいときの神頼み、南無萬の神々樣、どうぞ助け給へ救ひ給へと、一心に禱らざるを得なかつた、此樣を親や兄弟が見たら、どんなに思ふだらふ。

◇肉親でも知人でもない、赤の他人、道行く人の哀れと感じ、俺の家へ來いと、連れられて行つたのが、芝宇田川町の横町村田と云ふ車屋さんの家であつた。

◇私の信仰と私の勞働は此日から始まつた。新聞や牛乳の配達、築地活版所の活字配達など、夜中と朝の間に出來る勞働をしながら晝間は學校通ひをした。寢る時間はホンの僅かでも、疲勞の爲によく熟睡が出來た。身體は愈々益々健康で神經衰弱や胃病などは、先方から御免を蒙つて、近寄らなかつた。

◇朝鮮生活の十七年間は、京城や北鮮の嚴寒地に居たが、寒中でも溫突と云ふものを使用しなかつた。溫突が嫌ひではないが、若し夫れが習慣性となつて、身體が虛弱になつたり、活動力が減じてはと、夫れを怖れたからだ。

◇一家の主人たる私に、妻も小供も、母迄が共鳴して、全部が眞似た。幸に風邪の神にも好かれず貧乏神も逃げ出した。

◇朝鮮を引揚げて、日本に歸つても、避暑も避寒も私の家には關係のない事柄の樣に思つて居る。お醫者樣にも、お近付きが出來ない。考へて見ると、貧乏人の家に生れたのは、私一生涯の幸福であつた樣に思はれる。

◈世間人間錄

平田久雄

丁子屋主人の小林さん、佛教團の仕事には全く一生懸命である▲それも近頃の趣味かといへば、どうして〳〵小林さんのあの方への熱心は、十年以上にもならう▲世間にあまり聞えない以前から、店内だけで信仰講話や法話を熱心にやりつゞけて來た▲小林さんのは全く本筋の信仰の、だん〳〵そだつて行つたものである▲それから店の幹部連中は、鈴木さん始めズイ分若い人々もあるのに、一同が非常に堅い信仰を有つて居るのは、これも世間に類の尠いことである

左團次丈と僕

日之出小學校　大山一夫

去年高島屋一座が滿洲歸りに乘込んで來て、京劇で一週間以上も大入を打續け、江戸式好劇家の溜飲を下げさしたことは、粋樣通樣連の記臆に新しいので、噂したばかりでも、丸橋忠彌の姿が髣髴としては現はれて來る。

その際僕は替り目〳〵に出かけ千秋樂の日には同僚三十餘名と總見をした。尚僕は高島屋と會見したり、驛迄も足を運んだ、そこで氣早やの連中は僕を好劇家にして仕舞つた。

好劇家……少々恐れ入る、僕は芝居を嫌いもしないが、又そんなに好きで、聲色を使つたり所作を眞似たりして、他所の味噌を腐らした覺えもない。尤も妙技に接する刹那、芝居的彌次、即ち成田ヤー、音羽ヤー、高島ヤー、新駒ヤーの懸ケ聲を飛ばす位はせぬとも限らない。

古い話で少々黴が生えて居るが團菊左の諸名優が、新富に、歌舞伎に、明治座に立籠つて、各其個性特長を發揮し鎬を削つた、所謂舊劇全盛時代に僕等はクラス會などを劇場に持込んだものである。勸進帳、夢安太平記、牡丹燈籠、曾我夜討、花井お梅の箱屋殺し、曰く何、何、何と活動寫眞のやうに浮んで來て、恍惚としてその當時の名優が偲ばれるではないか。

しかも現代の高島屋が、先代の劇風を十分に飲込んで居ること、父の名を汚さぬことを、現實に見せつけられて、僕は大に意を强うした一人である。僕は今の高島屋が益々努力を重ねて、東都否我劇道を作興せんことを心窃に念じて止まないのである。

僕がこんなに思ふのはそも〳〵理由があるからである、僕と彼とは三十六年前からの知合である、そのいはれ因緣をはしよつて話せば次のとほりである、思ひ起せば教育勅語の煥發せられた年、第一回帝國議會の開かれた年……即ち明治の廿三年は、微々たる僕の一身にとつても記念すべき年である

僕がはじめて小石川竹早町の師範（青山師範の前身）を出で、訓導の肩書を以て教壇に立つたのが此の年の四月であつた、僕は東都の商業區たる日本橋の坂本小學校に赴任した、師範を出た許りの青い教育家であるが、時勢が時勢で校長の次の次に据ゑられて、型の通り尋常三年といふ低と高との中間學年の男兒七十名許を擔任することになつて、非常な希望と元氣とで日々教鞭を揮つた、處が下町は山の手と子供の樣子が違つて、附屬小學校などよりも早引する生徒が中々多かつた、早引の理由をきけば平氣の平座で、しかも權利でもあり又名譽でもあるかのやうに『芝居へ參りますから』と。

僕は甚だ喜ばなかつた、こいつけしからんわい、一つ訓誡を加へてやらふと思つて、或日の修身の時間に滔々と芝居——役者の攻擊をやつたのである、一同は謹聽して居つたが僕の訓話が一段落つくと右手を擧げて發言を求めた一生があつた、見れば評判の茶目君である、何ですかと發言を許すと『先生高橋サンは左團次の子です』と極めて簡單ではあつたが、何となく言外に意味の籠つた言葉遣ひなので、七十人許りの他の子供達は僕と高橋との顏を等分に見分けた僕は何それ位のことでは……といふ意氣込で、卽坐に『ああさうか左團次や菊五郎や團十郎のやうな人達は天下の名優でそれは別である』と、苦しい說明を附加してこの幕はすんだ。僕は茶目君によつて、始めて僕の學級の高橋榮次郎が名優市川左團次の長男であることを知つたのである、高橋榮次郎君は顏貌の整つた極溫順な子供でこれといふて目立つたことはなかつた、尤もそれ以來僕は高橋榮次郎の行動評判については、特別に注意を拂ふやうになり、新聞にでも同君に關した記事があれば、坂本小學校在職當時のことを想起した、去年會見した時にも、此一幕を語り合つたことである。左團次丈も京城で僕と語つたことを奇遇と思つて居た樣である。

僕と高島屋との間には、こんな因緣話があるのだ、別れるとき『先生東京へ御出張のときは是非に……』といはれた。高島屋夫人とも挨拶を交換した、こん度は何處で何時遇へるか?、夫人同道で地方巡業の高島屋を見て僕は大に安心したのである。此稿はこれで幕にする。

京城つれつれ草

殖産銀行　守屋德夫

さみだるゝ頃

○さみだるゝまゝに寂しきは京城の街なる哉、本町筋など內地人部落はさもなけれど鍾路以北の鮮人街は人通りさへうすらぎて唯いたづらに道のひろきをこそ覺ゆれ、暮れ行くまゝに立ち並びたる露店のわめきもなく、ふけ行くまゝに路上に眠れる王侯もなし衣の白き、溫突の手狹なる、雨は鮮人プロレタリアの苦手なるべし。

○鮮人の傘さしたる何處となく調和を欠ぎて味なし洋傘など比較的身につきて見ゆれどこれとて疊みて持ちたる場合老皤など大方中程を握るに電車と言はず道路と言はず、うつかりしてつかれぬ樣御用心が肝要なり、殊に珍らしきは冠の上にさしかざしたる小傘なるべし屋上屋を重ぬるは現代都市の習なれどもこれは又一段と風變りて目出度し。

○松峴洞のあたり鮮屋櫛比聊か內地氣分を欠げどもたまさかに雨さへ降れば蛇の目傘の二ツ三ツ通ふも嬉し實にや世に蛇の目傘ほど仇なるはなし、男してよし女よし前を見てよし後よし近く見てよし遠くよし、格子戸立ち並びたるあたり褄かき上げたる女の白き素足など特に目立つもよし、實にや下町情趣はこの一本の傘につくべし。

○さみだるゝまゝに水嵩み行く清溪川はよし、滿々として岸を洗ひ町を貫き矢を射る如く狂ひ行くなり、日中は濁りて興なし、灯し頃ともなれば岸邊傳への燈火など千々に碎けて遠くつらなるあたり此土地には珍らしき山峽の情趣溯かずや

○さみだるゝ頃銀行など騷々し百姓銀行のことにしあれば『ひでり』を嫌ひ雨を慕ふこと池の蛙に劣らず二三日前蚊の涙程さへ降らぬお天氣續きに訪るゝ者何れ乾き果てたる面持ならぬはなし、降りて三日初めの程こそ御機嫌にてこれにて植付完了何百萬石の增收夢々疑ふこと勿れなど易者もどきのしたり顏なりしを天公には聊かも御遠慮なく疾風迅雷嘶し鳴物入りにて降りそゝぐに、搗てゝ加へて漢江增水三十尺とあり交通杜絕、河水氾濫、蠶村危ふし富平危ふし旭川堤又危ふしなど心細き便りの數々櫛の齒を引く如くに來るに早や石を呑みたる鼈の子の如くウツトリと空を見つめて

動かぬもあはれなり。

○雨の降る日に竹屋の渡し濡れて嬉しいもあひ傘、この情趣京城には求め難し漢江といふ流れはあれどさみだるゝ頃としなれば増水氾濫唯恐ろしき川と化すめり濁流滔々橋欄に迫るところ防水服したる人足消防果ては軍人など唯ひたぶるに堤を守れり修羅場とや言はん、もあひ傘など洒落べくもあらず。

蠻界を懐ふ

○積極的に銷夏せんとする青年あらば蠻界への旅行を勸奬す尠くとも富士登山や金剛山探勝に比し更に一層有意氣なるものあるべく前人未踏の天地は何等かの靈感を與へずにはやまざるべし。

○行きつまれる文化に筆硯を投じて嘆息しつゝある世の思索家に蠻界への旅行を推奬す現實に直視し得る原始文明は其の單純にして虚飾なく素穆にして眞摯なる必らずや卿等の驚異に値すべく一切の科學を超越して而かも猶圓滿完全なる生を營むを見ばそこに現代文化價値批判の妙諦をつかみ得べし。

○世の奮鬪に疲れたる人須らく蠻界に憩ふべし、山容水態千古の姿を改めず樹木縱に伸展し花鳥悠々として自らの爲めに鳴き自らの爲に咲く電信電話の煩なく自動車馬車の脅威なし心神暢達又何の屈托あらんや。

○世の贅澤に飽きたる人は蠻界に去るべし必ずや御氣に召す世界なるべし必要を滿せば足る生活と必要を充足せしむるに左迄苦勞を要せぬ世界は蠻界以外現代には求め難かるべし大自然の與ふる衣食住は頗る簡素なるべしと雖も而かも清新を失はざるべし。

○仰げば紫霞疊々、飛瀑中天にかゝり、臥して草木蒸々、天壽を全ふして生滅するを見る、鳥飛んで焦らず魚躍りて驚かず閒雲悠々大氣清新、近代文明の根跡を印せざる自然の如何に絶大にして壯嚴如何に優雅にして端正なるや殆んど都人の想像を許さざるべし。

○一口に蠻人と呼び狂惡首狩を事とすと觀ずるは謬見なり天性溫順にして快活天産に衣食するを以て原則とす一儲けしやうといふ氣持ちもなく蓄積以て富をなさんとする野心もなし朝星をいたゞきて野を耕し終日山に野獸を狩れば夕べは一村擧りて酒を酌み南風を歌ふ、千古鬱林の下激流岩をかむ畔焚火爛として輝き男女相擁して亂舞三更に及ぶ現代何處にか此樂土あらん

○頃日霖雨甚だしく加ふるに世事の煩雜を以てすそゞろに蠻界の生活を懷ふ今の文明人なるもの自ら自己の生活を窘束せしめて其の何の爲めなるやを知らず殆んど不可抗力化したる現代文明の餘勢にひかれて人生の眞義と幸福とを知らざるに似たり、ルツソウならねどこゝらでもう一遍『自然に還れ』と叫び度き心地す蠻界の旅行はこの意味に於て現代文明人各種の人々に對し貴重なる暗示と改造とを與ふるに足るべし。

勞農浦潮漫錄

廣江澤次郎

可驚探偵政治

ハルピン滯在中知己友人は懇々私に忠告して曰く

『赤い國の浦潮へ行つたら注意し給へ、莫斯科直轄の國家保安部と云ふ機關が活躍し極端な探偵政治をやり熾んに密偵を放ちて旅客の行動を亘細調査し此奴怪しいと見れば即坐にフン縛るよ、一見暴政とも見ゆる勞農政治批判も絶對に慎み給へ、スパイは所在に居て直に密告し君を不利に陷れるよ、疲弊の淵に沈倫する日本人中にも此スパイは澤山居るよ決して油斷し給ふな何時家宅捜索されても差支ない樣に嫌疑を蒙る樣な書類は燒き捨て給へ、紙屑の端に至る迄注意を要す、勿論電報や手紙に暗號は一切許されぬ何時檢閲されても差支ない樣にし給へ、隣室に晉聲攪大器があり君等の言語對話が明瞭に隣室の密偵に聽かれて居るかも知れぬよ呉々も注意し奇禍を蒙らぬ樣にし給へ』云々

追ひ出された白系露人の宣傳だろう、ナニ夫れ程でもあるまいと虚勢を張りて居たが扨て赤い國へ乘込んで來て見れば此親切な忠告が私の耳底にコビリ著いて居るので大胆を裝ひ平氣な態度で居たものゝ私の神經は鋭敏になつて居る若干薄氣味悪い感に襲はれる!、内々告白するが最初は大切な學丸も平生より五ミリメートル程上位に鎭坐ましました!。

吁!此疲弊

私の泊つた旅館『赤色浦潮斯德』は最も雄辯に赤露の疲弊を物語つて居る、水道の破損、壁の脱落洗面場の未修理、汚損した窓硝子の不體裁、其他一般的にドコとなく陰鬱な空氣が漲つて居る、王朝時代の繁榮や文化偲ぶべくもないコヽの支配人は元此ホテルの主人公であつたが家は沒收され國營ホテルとなり舊主人は支配人の辭令を頂戴仕つた譯だ、勞農官憲は大廈高樓を片ッ端から國有とする、其手段として先づ亂暴な家屋税を課する、五萬圓程の家に一ヶ年二萬圓程の重税を負擔させる、さなきだに疲弊困憊の家主連閉口頓首して投げ出す、玆に於て官憲は滯納處分と稱し競賣する、勿論誰も買ふ馬鹿は居ないから國營土地家屋管理所が引取る、斯ふ云ふ調子でドンゝゝ沒收する、舊家主は家賃を納め隅の少さな一室を拜借に及ぶ、恨み骨髓に徹し地團駄踏んで口惜がつたつて追ッ付かない、若し夫れ赤政府に對し怨嗟の聲でも放つたが最後直に監獄へブチ込まれる、平生當局に睨まれて居た奴等は容赦なくズドンと一發の砲聲と共に天國へ旅立ちを申付られる、元來勞農政府の理想は一人四坪主義だ、四サージン平方即ち八疊敷迄は與れる、家族があればモウ四サージン平方許される、食事は成るべく國營簡易食堂でと云ふ譯だ、簡易生活頗る結構だが扨て人間と云ふ奴は贅澤な動物で困つた者だ!。

苛斂誅求

露官憲は國家の爲めにとか人民の爲にとか云ふお手製の法律條項を楯に大鉈を無遠慮に振廻す、傳統を顧みず因習に囚はれず情實に忸まず犧牲を屁とも念はず人間味を考慮せず理想にのみ耽つて驀進する處究極は別問題とし其偉觀味は若干感心に價するが、現在の如く極端な重税政策を捨てぬ限り個人として勞農政治下で成功は先づ不可能とも謂ひ得る、極度の財政窮乏が然らしむる處であろうが商店……靴屋カフエー料理店等で其賣上額よりも各種納税額の方が多くて悲鳴を擧げたと云ふ實例もある、嘗ては中産階級、上流階級、其他智識階級と稱されたが連中の多くは今强度の不安と困憊と煩悶に惱まされ、氣の毒さうに神經衰弱に陷つて居る、社會構成の中樞機能が此重體であり不況の結果は勞働者にも餘り恩澤を蒙らしめて居らぬ、マダ〳〵勞農政治は試驗時代たるを免れぬが人民こそ災難だ、赤の高級役人中にも『露西亞が奈邊で安定するか豫測が著かぬ』とコボして居る者があつた、露スキーは革命により自由の代りに束縛を、安寧の代りに疲弊を、建設の代りに破壞を得た、要するに現在天下の權を握る六十萬人の純共産黨員が全露壹億三千萬人を試驗臺に載せて自由自在に研究して居るに過ぎない、兎やモルモッ

京城雜筆

貧相な男に題す

永樂町人

『昨日閑があつたので、一寸描いて見ました』さう言つて、笠原君がひろげたのが、この二つの繪である。何の氣なしに『誰です』と訊くと、『あなたですよ』に、ビクリとする。そばの人に『似とるかね』といふと、『たしかに……』と言ふ答へ――これでも相當福相で、相當美男たる自信がある――處が、これで見ると、全然幻滅の悲哀を、滿喫せずには居られない。若し私と言ふものゝ外に、世の中にモ一人こんな男が實在すると、私は一見『虫の好かない野郎だな』と、直感するに違ひない。時々自分の心の醜い發動を、見出して悲嘆するが、さて外貌を『これがお前だよ』と、つきつけられると、これも亦自信消散の、はげしい自失の谷につき落される。何んでも阿彌陀樣を信仰し、來世は極樂第一の美男兼資本家にうまれるんだね』。

試驗臺に載せて自由自在に研究して居るに過ぎない、兎やモルモットぢやあるまいし露西亞人は可愛想に！私は九一に誤られつゝある親愛なるスラブ民族に同情すると共に此眞相此實狀を究めずして毒草と知りつゝ空虛なる宣傳と美名に陶醉し亂舞せんとする低能兒を憐む。世界は白色國の桃色化と赤露の桃色化に達せし時始めて思想的にも文化的にも融合平調するものと信ぜられる、輕躁を戒む！喝

九一の註――

九一とは猶太人の暗語にして洋行中日本人が彼奴は九一かと訊ねる、九一と云へば本人の前で云ふても一寸解らぬからだ。小生臨借に及ぶ。

◇碁戰風聞記

平田久雄

朝鮮火災の三崎さん、碁は手筋のいゝのを以て聞へて居る▲先日鎭南浦の西崎氏の入京した時、二目を以て對局した▲敵は名に負ふ西鮮の豪將、三崎氏苦戰甚しかつたが、しかも敵を苦しむること再三しば〳〵危地に陷れたのは、非常な手柄である▲河内山社長慰勞會くらゐ開いてもよからう▲平壤大同銀行の豐田事務、初段の免狀を有つて居る、しかし曾て石を有つたのを見たことがない▲思ふに、所謂見物初段を以て、一生を終るつもりだらう▲小杉謹八氏が強い先づ有賀さんに先ぐらゐ、町の人としては、一寸氏の右に出るものはあるまい▲醫師の佐藤伊藏氏が初段といつて居たが、實は小杉氏くらゐなもの、佐藤氏に次いで、本町の杉本氏が強いといふが、果してドノ程度のものか……。

—新作狂言—

おそろし銀行

仁川松林里　茂木和三郎

▲シテ『これはこのあたりの會社のものでござる。この度私の會社が、内地の大きな會社と合併を致したによつて、其挨拶のため唯今から銀行へ參らうと存ずる。いや○○○と申せば、世界になりひびいた醬油で御座る。其造り元の會社と合併したことで御座れば、銀行でも嘸かし喜んで、何かと便宜を計つてくれることで御座らう。何かと申す中にはや是ぢや。物もう案内もう』▲給仕『どなたで御座る』▲シテ『私は○○會社のもので御座る。支店長どのに御取次下され』▲給仕『まづお通りなされませ』▲シテ『これは支店長どの、御無沙汰をいたしました。先日書面でも申上げた通り私の會社も○○○○と合併致して、私は其の支店長といふことになりまして御座れば宜しく御願ひ申します』▲支店長『さようで御座るか、それは結構な事で御座る。時に昨日名義書き換への御書面が出て居りましたが、あなたの名義は支店長とあつて判が支配人とある。上と下と揃はぬといふ事は工合がわるいではないか』▲シテ『支配人とあるのが私の專用の判で御座れば其通り御屆けした次第で御座る。自分專用のものはこれときめて御屆をして置く以上たとへ三分判でも差支はないでは御座らぬか』▲支店長『理屈を云へば其の通りぢやが、銀行は形式に重きを置くによつて直して貰はねばなりませぬ』▲シテ『……』▲支店長『商賣の取引と云ふものは理屈通りには行かぬものぢや。圓滿の取引をせうと思ふならば理屈は云はぬ事で御座る』▲シテ『……』▲知らぬ人（後方から）『今度あなたの會社は組織が變更になつたとの事で御座るな』▲シテ『左樣で御座る』▲知らぬ人『あなたは支配人の登記をなされたか』▲シテ『まだ合併した許りで其登記も出來て居りませねば支配人の登記はしてありませぬ』▲知らぬ人『支配人の登記がしてないとあらば手形の割引はなりませぬ』▲シテ『あなたには、まだ御話はしませぬが、今度私の會社は二千五百萬圓拂込濟の大會社と合併した事で御座れば僅か五千や七千の商業手形の割引をするのに差支は御座りますまい』▲知らぬ人『いやさうはなりませぬ。いくら會社が大きくなつたといふても正式に支配人の登記が出來ぬ以上は、銀行の規則としてさうするわけにはいきませぬ』▲シテ『規則はさうかも知れませぬが、元の專務の私が、引つづいて支店長となる事で御座りまするし且つ私の會社は、あなたの銀行の創立以來長く御取引をしてただの一度でも間違ひは仕出かさぬ事で御座れば、其邊は御信用下されてもよいでは御座りませぬか』▲支店長『支配人登記はいつ出來まするか』▲シテ『まだ本社から登記の通知が御座りませぬ故いつとも申されませぬ』▲支店長『然らばいつ頃出來まするか』▲シテ『當り前にゆけばすぐに出來る筈で御座れど、登記所の事故どのやうなさしさわりがあつておくれぬとも知れませぬ故、いつ頃ともはつきり申上げ兼ねまする』▲支店長『然らば二年も懸りまするか』▲シテ『其邊の事は常識で御考へ下され』▲支店長『何を常識で考へろと申すか失禮な事を申さるるな』▲シテ『……』▲知らぬ人『合併の條件は何々で御座る』▲シテ『其樣の事はおききにならぬでもよう御座りませう』▲知らぬ人『いや銀行といふものは、取引先の内容に立入つてよく承知致さねばなりませぬ』▲シテ『それは信用に關係のある事はすべて御承知の必要が御座りませうが、合併の條件がよかろうとあしからうと、合併後の會社の信用には何の關係も御座らぬ筈ではありませぬか』▲知らぬ人『あなたは○○さんでは御座らぬか』▲シテ『如何にも私は○○で御座る』▲知らぬ人『○○さんといへばこの土地でも多少人に知られた紳士では御座らぬか、あまりに言葉が亂暴では御座らぬか』▲シテ『さういはるるあなたは何方で御座るか』▲知らぬ人『私は次席の○○で御座る、御目に懸るのは今日始めてで御座る』▲シテ『さようで御座るか、次席の方ろといふ、銀行を何んと思ふお

テ『さようで御座るか、次席の方ならば次席の方と早く仰せられたらよう御座る。會社の合併條件まで立入つて御尋ねで御座れど、どういふ御方か御挨拶も無いので、申上げてよいか、どうかわかりませぬ故、何も申さずに居りまして御座る』▲次席『いや銀行は誰に御話下されても決して他に洩らすやうの事はありませぬ程に、誰にでも安心して御話下され』▲シテ『あなたの方はさようで御座ろうが、私は申上げてよい方とさうでないのは區別して考へまする』▲支店長『そなたの言ふ事は一々喧嘩腰では御座らぬか、登記が二年もかかるかといへば、常識で考へろといふ、銀行を何んと思ふてお居やる』▲シテ『左樣、銀行は安い利息で金を預つて高い利子で金を貸す處で御座りませう。預ける人も、借りる人も、皆銀行の御客樣で御座る。借りた金を期限に返す以上は、銀行にペコ〳〵頭を下げて御無理御もつともと御機嫌を取る事は無用な事と考へて居りまする』▲支店長『『あゝ云へばこういふこの不屆者めが』▲シテ『おそろしや〳〵こういふ銀行と取引は眞ッ平御免、早う歸らぬとどのやうの事にあふも知れぬ、おそろしやおそろしや。▲支店長『この無禮者めが……やるまいぞ〳〵やるまいぞ〳〵。

近詠五首

日本醤油會社
京城出張所　市山盛雄

めぐりあひ氣がおちつきて吾妹子のつかれをもらすこゑのかなしき（夜さくら）

いろ電燈ぐるり廻りてま白なる盛りの櫻あざやけきかも（同）

妻を子をつれて來つれば飲む酒も樂しくあるか夜櫻のもと（同）

潮ぐもる沖べはろかに帆をあげて風にさからふ船のみゆるも（仁川にて）

松の葉をひとりはみつゝうつそみのはかなき願ひまたふやしけり

◇高級一言子

石川利夫

七月十三日、朝鮮ホテルで、有賀殖銀頭取の軍任披露宴があつたが來會無慮二百何十名といふ盛況▲頭取の挨拶例に依つて悠揚迫らずしかも理路極めて端然▲齋藤總督來賓を代表して、謝辭を述べ、最後に『自分と殖銀とはまア親類同樣だから文句はこの邊でやめる、但し來賓各位に於て御希望があればどうか御腹藏なく……』思ふに斯うした機會に、總督自ら隱れたる名意見を抽出し、聽取せんとするつもりだらう▲處が、韓相龍氏を別として、その他は大底大聲が鳴ればスタコラ踊り出す世上知名の一言居士ばかりで、むろん傾聽するやうな內容もなく、結局のところ『中村再造どんのが記憶のたしかな點だけでもまア秀逸か』といはしめた▲悲慘だ……京城にもモット〳〵高級の一言居士が要りますね。

◇廣告專門誌

吉田莊一

京城新聞の編輯長だつた石川久臣氏が今度『京城廣告雜誌』といふのを初める▲その創刊號は、この八月十五日に世に出る筈である▲廣告はすべて一圓均一、それで裏表紙にも載せれば、表紙裏にものせる▲マジメに廣告術、圖案、文案の研究もするといふ▲それから萬年社式に、廣告仲介業もやり、依頼者をしていろいろの便益を得せしめるといふ▲こんな雜誌も一つは、京城に必要である▲どうか好感を以て迎へられ、そしてすぐやかに發達せよ。

蘇峰先生と私

殖産銀行　中島司

遠隔な京城に在りては、親しく先生の謦咳に接することも叶はないが、南山の麓なる我が自樂草舍の書齋に掲げたる書額を仰ぎつゝ朝夕先生を景慕し、先生の筆禍硯壽を祈念せざる日とてはない。先生とは恩師德富蘇峰先生の事。

初めて蘇峰門下に參したるは、明治四十四年國民新聞に入社した時であるが、實は夙に少年の時より私は先生を師と仰いだ。高等小學の晩期から中學時代を通じて私は蘇峰文の熟讀者であつた――今日も亦然り――。『新日本の青年』『吉田松陰』などの著書は勿論あの赤表紙の國民叢書は殆ど悉く之を讀んだ。就中『靜思餘錄』や『天然と人』の如きは、幾度誦讀したかわからない。筑後河畔の長堤に、草を褥とし、悠々たる江水を前に、先生の文章を朗誦したるはそも幾春秋ぞ。今日もなほ記憶に新たなる一事は、昔先生がブルツクの英文學史を紹介せられたことがある。その文を讀んで、矢も楯もたまらなく其の書が欲しくなり、丸善に注文して袖珍本の原書を取り寄せ、それが來た時そゞろに胸を躍らせたことであつた。蘇峰先生の文章の當時の青年者間に及ぼした感化は、私の經驗が示す如く、眞に偉大なものがあつたであらう。若し此の未熟な私に、山陽、馬遷、マコウレイの史筆、杜甫、ミルトン、ウオヅオースの詩篇、さてはエマーソンのエッセイズを多少理解する文學趣味があり又た野に咲く一莖の草花、梢を辭する一片の落葉にも、大自然の彌理を靈感する心性がありとせば、そは主として蘇峰先生の感化啓發によるものである。私が如何なる天地に棲息し如何なる境遇に離離するも、古人を伴とし天然を侶とし、聊かも退屈を感じないのは、まことに先生の賜である。

初めて天下の蘇峯先生に私が餘所ながらも見えたのは、早稻田在學中、學生有志で組織した新聞研究會の例會に、先生を招待して講演を願つた時である。其時先生は新聞及び新聞記者について頗る有益頗る興味ある講話を試みられた彼の時の先生の髭容が今尙此の耳に鮮やかだ。『新聞記者といふものは、二六時中、否四六時中多忙で苦しいものであります、丁度大きな釜の中で下から瓦斯やコークスで焚かれて居るやうなものであります』と云ふ言葉が耳底に殘つて居る。

其の頃すでに私は新聞記者として文章報國を志して居た。成らうことなら先生の國民新聞に修行したいと思つて居たが、學校の關係で東京毎日に義理往生させられた

【三八】

十數日にして社内に紛紜起り先輩多數と共に退社した。東京日日に轉じたが、其社が大阪毎日に買收され、間もなく緣ありて國民新聞に入る事となり、私の素願が叶つて、初めて蘇峯門下の一人となるを得た。

當時の國民新聞社は日吉町の一角四層樓であつた、――それは先年の大震災で全く燒失した。編輯局は二階であつた。可なりの廣い室一ぱいに各部各係りの机が配置されて居た。國民新聞社には社長室が無い。德富社長は一人社長室に納まつて、ベルでも押して頗で差圖するやうな社長とはちがひ、編輯局の中央に質素な古色蒼然たる机を置き、社員の働らきを監督しながら自から間斷なく勉强せられた。私の机は社長席から數歩の近距離にあつたから、天下の大記者蘇峯先生の勉强振りを窺ふには便利であつた。先生の卓上には毎日新著の内外書籍新聞雜誌が堆かく積まれ、それに一々眼を通して居られた。洋書などによく色鉛筆でアンダアラインを引いて居られた。披見された後のタイムスなどは、重要記事を洩れなく保存されたやうだ。當時毎日『東京たより』を草せられたが、赤罰の唐紙小形の原稿紙に毛筆で書かれるその速力には毎度驚ろかされたものだ。晝食にはよく麵類をとつて居られた。蕎麥がきも好まれたやうだ。蕎麥などあがる時は立ちながら箸をとられた。

眦け出しの平記者であつた私如きの書いたものも一々目をつけて少し出色の記事でもあると席を離れて私の肩を叩き賞められた。大正元年秋今上御登位最初の陸軍大演習が武相の野で行はれた時、經

濟部所屬の私は不意に命ぜられて　して居た。折柄某記者が退社し去　ゆるの時の何れの日にあるかは自

京城雜筆

濟部所屬の私は不意に命ぜられて勝手違ひの從軍記者として特派された。兎も角も任を果して歸社したら、先生は私の腕を捩えて『ヤア御苦勞、通信が大變よかつたよ』との言葉を下すつた。その一言が私には無上の感激であつた。

國民在社時代に直接間接先生の垂教を蒙むること少なくなつたが大正三年早春先生より派せられて其の監督下にあつた京城日報に記者として來り、經濟部を擔任することゝなつてからは、先生との交渉が一層深くなり、指導、教訓、激勵を蒙むること益々多かつた。京城へ出發に臨んで先生は日本倶樂部で午餐を饗せられ、折柄出版されし『時務一家言』に自署して餞別に下すつた。

京城日報時代には年に必ず一回或は數回先生は渡鮮された。先生京城の寓居は以前は西大門にありて『愛吾廬』と呼ばれた。陶淵明の詩中に其の句があると記憶するが、先生がそれを採られしや否やは明かに存じない。後に北門の手前清雲洞に居を卜して、屋敷内の大樹に鵲が巣くつて居るのに因んで『鵲巣居』と名けられた。居は小やかな朝鮮家屋であるが、屋圍の天然自然林泉の風致は實に愛すべき清境を成して居る。先生來城の節は此の鵲巣居が先生の安息所となり勉强所となり接客所となるのであつた。

京日時代私が先生から激勵を受くること甚だ多大であつた。或る年來鮮の際先生は『蘇峰文選』の一書を上梓に下された。其の書の扉には『直擔血性作文章』の七字を私のため書き與へられた。當時京城日報社は社業改新の必要に面して居た。折柄某記者が退社し去つたに關聯して、寺内總督から何か言はれたその一言が先生には餘ぼど癪に障つたやうで、先生は私へ次の意味の手紙を送りて私を鼓舞激勵された。それは大正五年四月の事。『小生七月に行くまでには願くば京日社の氣運一大擴進を期したく吳々も努力を祈る、特に總督をして何某（氏名は略す）去りて記者なしと云はしめたのは吾等同人の一大恥辱であるから、貴兄は小生の爲め屹度此の羞を雪ぎ京日論壇文壇其人あることを總督は勿論天下にも知らせるやう奮發偏へに待望する』かゝる先生の寄託を蒙むりて私は洵に感激に堪へなかつた。併し微力短才なる私は先生の待望に副ひ得ない事のみであつた。而して大正六年の九月には同僚山崎珂水君と共に退社するに至つた。其間の事情は茲に述べる必要もあるまい。兎に角當時支那漫遊の途次滯城中だつた先生は珂水君と私の退社を快諾された。鵲巣居に先生に見えた朝、先生はいろ々々深切な言葉を下され『君社はやめてもやはり吾輩の門人だよ』と言葉强く仰せられた。その時私の乞ひに應じて一絶を揮毫し與へられた。『爲誰勞苦爲誰顰、花落花開五十春、睡覺閑窓無一事、青山笑對白頭人』と。それは先生の舊作である。私にとり特に意味深長に感ぜられた。之を表裝して壁間に揭ぐ。年を經て感痕益々淋漓たるを覺える。

爾來操觚の業と遠ざかり、未だ志を伸ぶるに由なく、碌々として空拳を嘆ずるのみ、實に先生に對して慚愧に堪えない。たゞ幸にして精氣未だ衰へず、文章報國の志は存養して居る。先生の恩義に酬ゆるの時の何れの日にあるかは自ら知らざるも、讀書生として修養は怠らざるを心ひそかに期して居る。先生に就て書かんと欲する事は殆ど限りを知らない。殊に近年就中震災後の先生については此の心言はんと欲する萬々、しかし之は他日に期しやう。幸に微々たる私の生涯の一部分を通じてさへも偉大なる蘇峯先生の風格の一面でも窺ひ知られることができれば、本文の書き甲斐があつたといふものである。

（大正十四年七月十八日漢江大氾濫の夜蠟燭の微光の下に）

◈病臥十日記

雜筆生

七月十三日、寺尾さんをお訪ねした晩から、どうやら氣色勝れずとう〳〵病床に横はつて了つた▲思ふに、龍山行のついでといふつもりで、人道橋畔に歩をはこび、濁浪をわたつて來る濕風に、小一時間も立ちつくしたから、咽喉をやられたものと思ふ▲この間氣にかかるけれど、M夫人をお見舞すること出來ず、京日眞砂氏の靈柩を送ること出來ず、先輩樂堂氏の溫顏を見ること出來ず、空しく高熱に呻吟す▲その中例の大洪水……電燈は消え、水道は斷え、龍山全く波浪の裡に沒す▲モウ迎もぢつとしては居られず、社中や社友を煩はして、寺尾さん、河内山さん、小水さん、白神さん、鐵道局諸先輩をお見舞に行つて貰ふ▲一人も目的を達せず、げんなりとして戻る曰く迎も行かれません、曰く行先不明、曰く警官が何としても入れてくれません▲床中これを聽く憂ひ愈々甚し（廿一日記）

噫重患

東小門外平山牧場　平山政十

人の健全强壯なる時には常に醫師を忘るゝのであつて、其の一たび疾病に冒さるゝと、初めて玆に治療の道を思ひ出すのである。若し現時の社會を斷ずるに之れが救治の策に汲々たる醫師の數を以てせんか、現今の社會は一大重患に罹つて居ると謂ふても不可でない凡そ社會の體なるものは極めて大なるものであつて、之れが組織の要素も亦た種々樣々である、之れを收拾復舊する事は亦た困難の事業である、若し醫師にして經驗を缺ぎ、藥餌にして其の調合を誤つたならば、啻に病者を治せざるのみならず却つて之を殺すの椿事にもなるのである、今や此の社會患に就いては其の危險最も恐る可きである、現下の我日本は精神界に黴がぬけて居るから日本固有の美味がないばかりでなく日々腐敗に傾くのは確な事實である、日本人の頭腦は歐米の善美なものは投て措いて却つて總ての邪說、謬論、卑猥、醜惡なものに浸り切つて居り、又浸りつゝある現狀ではないか、トルストイ、ベルグソン、レニン、ボルセヴイズムなどが何と盛んに研究せられることであらう。ジヤン、ジヤク、ルツソーの民約論が全譯せられ、マルクス全集が版を重ねゾーラ、ダンチオを始めとして其他滛靡極まる小說が日日どし〳〵出版せられて、所謂文士殊に妙齡青春の男女に愛玩せられて居る、此の研究し愛玩せらるゝ書籍が中には或は百版以上にも及ぶものがある、若し現時の低氣壓のまゝで繼續したならば颶風がやつて來て社會紛亂の波を煽り國家轉倒の砂を捲くのが杞憂であれば僥倖である、善樹は惡果を結ばず惡樹は善果を實らぬルツソーの論は身の毛の戰慄するフランス革命を生み、マルクスの說は目もあてられぬ慘憺殘酷なるバルヂサンを生んだのではないか此の危殆の淵に陷つた我國を救ふには如何にせば宜しいか、是れに就いては心ある多くの士は狼狽して居りはせぬかと思ふ、此の點に就いて我國の社會政策家若しくは社會改良家は海外より輸入せる醫藥を日本社會の大患に投ずるに當りては須らく先づ此の醫藥が他國に投ぜられて効を奏したか將た害を來したかを潛心熟慮研究せなければならない、此は是れ用意周到、戒心嚴密の道であつて賢者の云爲は宜しく此くの如くならん事を望むものである、醫師が人の病を治せんとする時は亦常に此の態度でなければ危險である、激藥なれば之れを獸畜に試して而る後に之れを人に投ずるのを例としなければならぬ、常人ですら尙且つ之れ位いの注意をして居る、況んや社會を救治せんとする名醫たるもの之れを知らずして博士氣取りをされては誠に寒心の至りである、古往今來理想を提唱するもの現時の如く盛んなるものはない、是れ固より排す可き事ではない、寧ろ稱す可きであるが、凡そ人の一事を行はんとするには必ず先づ其の腦裡に一の理想を畫くの要がある、夜中燈火なくして旅行する者はない、理想は蓋し燈火である、人生の行路は是によつて照さるゝのである、されど人生の要は單に一つの理想を有するに止まらず其の理想が世に實現せられ得べきものを持たねばならぬ、借問す！、今日の社會改良に從事する幾多の學者、政治家、論客の中には理想の實現せられ得べきものを提唱する者が果して幾人かある！、社會改良に就て吾人の記憶に呼び起さるゝものは彼の民間の傳說と詩人の想像とに上りたる太古の黃金時代是である、當時は人皆自由獨立の牛を送り法律もなくして義自ら行はれ、刑罰なくして國自ら治まり、警察吏員の手を假らずして民其の堵に安じ、甲冑もなく刀劍もなく兵士軍艦の必要もなくした正義の神は遠く天に飛び去らなければ幸で畢竟是れ夢のみで畢竟之れ空想のみで此の際之を今日の社會論者に期す可きでない、嗚呼

冑もなく刀劍もなく兵士軍艦の必要もなくして天下の有生皆鼓腹して樂んだのである、世は永遠の春であつた、花草は蒔かずして發開し、野田は耕さずして豐熟し、江河には仙酒流れ、檻木には甘露滴れり云々と、嗚呼是れ古代詩人が吟哦した所であつて假令其の言が美で其文が妙であつても亦た之れ一の想像に過ぎなかつたのである

吾人が今日幾多社會論者の主義言論を聞く時に其の目的とする所正しく古代詩人の想像したる黃金時代を今の世に出現せしめんとする樣に思はれるので而も論者の意思が茲に成功を期せんとするのである、然れども論者乞ふ記せよ、黃金時代は去つて悠々『鐵』時代が開始せられて以來相當の年月を越へて來たのである、今や國民の理想から榮譽、誠忠、廉潔等の美德は隨分薄らいで來た、之れに代るに詐謀、野心、浮華驕奢等は益盛んに、黃金時代は金權政治に變り鐵時代は生存競爭と强者の權利主義とによつて一層殘酷となつた斯かる戰雲慘憺、悲風蕭條の際には彼の地上最終の留存者と歌けれた正義の神は遠く天に飛び去らなければ幸であると思ふ、而しながら不幸にして同神も亦た既に世を去つたのではないかと氣使ふのである、此の如き社會の現狀に在つて太古黃金時代の安寧幸福を追想して漫りに自由平等を叫び、徒らに獨立不羈を吠へ、或は根本的改革と云ひ、或は新時代の出現と云ふ樣な事は畢竟是れ夢のみで畢竟之れ空想のみで此の際若し榮譽、誠忠、廉潔等の美德を復舊して天下の人々を各々其位地に安んぜしめて其の勞苦を忍ばしめ、其の本分を重んぜしめ又た其の意義を愛せしむるを得たならば其れ夫れが社會に寄貢する事の功實に偉大な事を思ふのである、斯くの如き重且つ大なる任務は到底之を今日の社會論者に期す可きでない、嗚呼個人よ、國民よ、爾をして幸福ならしむるものは爾の所有する富ではなくて爾の行ふ所の德である、之れ實に萬古不磨の眞理である、要するに國民道德の旺盛、衰退に因つて日本帝國の運命は或は盛へ或は衰ふると云ふ事で我國の現狀は實に危險に陷らんとして居る。

心頭語

雜筆記者

○

有賀さん、再び殖銀頭取となる總督府は、やつぱり眼が見え、することが公明だと思ふ。

○

有賀さん位、あの仕事に趣味を有ち、身を入れて、眞劍にやつてる人は、先づなからう。

あの人があの地位にあるのは、內にも外にも『安心』そのものである。

○

有賀さんには、殖銀と碁——この二つが全生活面にあるばかりだらう。

パコタ公園の勝利の女將曰く、いつも普通の宴會なら、一番さきに立たれるんですが、今晩は特別です（この日碁會あり）お道樂といつたら、碁だけですからね、碁ぐらゐはいゝでせう……と、有賀さんの碁道樂は、斯うして天下御免となりつゝある形勢だ。

○

弓削さん去り、安藤さん去り、大塚さんも亦去る、相識る人段々半島を見捨てるのは、少々心細い

○

弓削さんは、鄕里岡山で、晴耕雨讀、すつかり現代の陶潛先生となつて居るらしい。

このまゝうもれる人でもあるまいが、このまゝうもれると、更に面白いやうにも思はれる。

天災總監

朝鮮經濟日報社　小野久太郎

內地に地震あり、朝鮮に天災あり、日韓併合して、天災地震が多くなつては誠に心細いが、朝鮮建設は先づ天災を征服せねばならぬのだから、又實に難い哉だ。然るに下岡政務總監の着任以來此の天災は愈々猛威を振ふに至つた、著任途上西鮮稀有の大水害に見舞はれ、續いて南鮮寧前の大旱魃に惱まされた揚句、今亦漢江、洛東江未曾有の洪水に襲はる、よくも天災に緣の深き總監哉、斯の如き代表的天災の洗禮を受けては天災總監の異名を受けぬ譯には行かぬ、而して天災總監の名は地震加藤と共に末代までも殘るだろうが、只狂言に仕組むべく背景が餘りに廣大過ぎて未來の成田家も地震加藤の如く、たやすくは演じ兼ぬることだろう、而も天災總監の眞の演技は大正十五年度以降にある、天災で幾變遷を重ねたる荒野原を活舞臺として思ふ存分妙技をふるはうとするのだから實に非凡の手腕を要す、天と地と人との間に立つ獨り舞臺で天地人とピッタリひやうしを合はさねばならぬのだから並大體の事であるまい。

されど天も地もあらゆる啓示を與えて居る、天は語らず人を以て言はしむで、漢江の水は六十年來又洛東江は四十年來の椿事だなど、所謂『何十年來の出來事』は殆んど毎年の天災期に繰り返し云ひ觸らされて居る『國家百年の大計』といふが所謂『何十年來の出來事』も亦『朝鮮何十年の大計』を立てよとの天の啓示であるまいか。地も亦之に伴ふて啓示を怠らぬ、天の降らした水の吐き場を塞げば氾濫を示し、天水を利用せねば旱魃を敎ゆ、山と川と海とは天水を萬遍なく分配して慘害を防ぐ自然の設備である、其の山の礎を伐り、其の川や海を襲いては水害も旱魃も海嘯も起るのが當然、治山治水を高唱しても自然の理に合はぬ區域を劃する行政では其根本を治め難い、天水を分つ爲には山に分水嶺あり、川に流域あり、其の分水嶺を横斷し其の河流を縱斷した地方行政區劃は全く治山治水を妨げはせまいか、李朝の暴君が三十年前に分ちし不自然な行政區畫に拘泥しては徒に自然に背き經濟を妨げ朝鮮統治を誤らしむるの外はない、昔は鷄林八道と稱して比較的自然に順應した區劃で政道を布いたものだが、新政十五年未だ行政の還元も行はれぬとは實になさけない、各人は盛んに陳情請願に努めて居る、只併し始末におえぬのは此の人の要望である、ウッカリ之に迎合すると二村洞堤防に十萬圓も捨てねばならぬ結果を齎すのだから天災總監は天地自然を背景として獨舞臺で妙技を擬せば千七百萬の人ともひやうしがピッタリ合ふ譯だらう、天災は忌むべきである、併し天災亦利用し得られざるにあらず、天災總監は昨年の旱災を利用して盛んに救濟事業を起して朝鮮民衆の爲めに盡した、今回の水害は更に一層利用して盛んに經綸を行ふことであらう豫算編成に當面して天災總監の劃策や如何、水害の罹災者には誠に氣の毒だが天災を利用して豫算を充實し、事業が勃興すれば禍が轉じて福となるもの、況んや朝鮮の水害に凶年なし、大水一過、氣溫順調、既に豐年を豫想さるるに至つては朝鮮の爲には實に此の上もなきことで、天災總監も茲に幸運總監となる譯である。

◈龜屋主人論

平田久雄

經濟日報小野氏の曰く、趣味と職業と一致して、初めて働き甲斐がある……處が廣い世間を見ると、趣味と職業と一致しない——つまり調子の合つて居ない三味線で、無暗矢鱈にほろん〳〵やつてるものが多い、勞して功なき所以である、私の見る處では龜屋主人の進さん——あの人などは趣味と職業を合一させた立派な人物で、だから安心して本業を守り、その本業は日進月歩の觀がある、後進自分の如きも敢て進さんを模範として今後の半生を大に努力するつもりであると▲若草町S、Aといふ人及び仁川澤田氏から水谷さんの執筆『史外史話』を、大相面白く讀む、毎號たのむとの御希望——編者として光榮である、兎に角水谷さんにお願ひして見ます——。

だ。

自働車と犬

苑南洞寓居にて　加藤伯嶺

自働車と犬！、何れも奔るのが疾い、標題に瞞されて驅け競べでもするのかと早合點してはいけない。

之れは僕が安東縣に居つた時、自働車と犬とに依つて支那人と朝鮮人の性格が能く判つた、其れを見る度に微笑まずには居られなかつた。

當時僕は支那の門閥家から清の西大后が愛撫したと云ふ滿洲狆の裔を貰つて飼つて居た、目方は漸く一貫五百目位の小犬であるが、人に余り慣れず無暗と吠へるのが癖だ、其名はポチ。

舍宅の前は四番通りで、六道溝方面又は新義州から新市街を經て舊市街に行く道であるから、人家は余りないが、交通は頻繁だ、通る者は主にニーヤとヨボだ。

ポチは雨の降らぬ晝間だけ門内に見張る事を日課とした、彼の嫌いな物は白衣と千草色だ、千草を嫌ふのは祖先を忘れた背德と譏る犬があるかも知れぬが、人間でさへ生の親より育ての親を慕ふものだ、況んや犬に於てをやだ。

幾ら吠へられても千草は知らぬ顏で行き過ぎる、女であつても同樣だ、ポチは張合がないと思つてか時には追ひ縋がつて足許で吠へ付くが、其れでも吾不關焉の態度だ。

白衣は全く之と正反對だ、吠へられると男女に係らず恐れ且つ憤慨する、直ぐ石を拾つて擲げ付ける——するとポチは奥の手を出し家の中に遁げ込んで大に吠へる。

吠へられる程白衣は自尊心を傷けらるゝのか益々怒つて支關先迄闖入し、ポチを相手に盛んに喧嘩をやる。

僕は在安中大抵の外出に自働車を用いた、どの自働車でも行手の中央に行く人があれば運轉手はプー〳〵と鳴らして注意するのが務だ。

千草はどの國民とも同じく直ぐ道の端に寄つて車を避ける、避け方は鈍重丈に靜かな方だが、其方が危險が少ない。

白衣は道の中央は車の通る可きものだと知つても知らぬ顏だ、先へ驅け拔けようとするのは無禮も太だしいと云ふ氣が腹一杯で振り返つて自働車を見た顏にも目にも現れて居る。

白衣の女は其れが一層太だしい依然悪く落付いて千斤の重をなす尻を振り立てゝ大道狹ましと濶歩する……避けねば車が進めぬと知つても、矢張り吾不關焉だ、運轉手に癇突を喰ふ迄。

自働車に怯なる千草は犬には勇だ、犬に怯なる白衣は自働車に極めて大膽？だ、僅か安東丈の觀察であるが……。

又洛東江は四十年來の椿事だなどゝ、所謂『何十年來の出來事』は に十萬圓も捨てねばならぬ結果を 齎すのだから天災總監は天地自然 さんにお願ひして見ます——。

詩學古事抄錄

萬歲書閣主人　古城梅溪

知音

伯牙善く琴を皷す鐘子期善く聽く伯牙琴を皷し志高山に在れば子期曰く善ひ哉峩々乎として泰山の如し志流水に在れば子期曰く善い哉洋々兮として江湖の若し伯牙念ふ所子期必ず之を得（列子に見ゆ）

鐘子期死す伯牙琴を破り絃を絶ち身を終るまで復た琴を皷せず以爲く爲めに皷するに足る者なしと（呂氏春秋に見ゆ）

嫋非流水韻。叨入伯牙絃（李白）風號流水琴（九齡）寧思竊抃者情竭爲知音（同）誰覓是知音（喩鳧）何必鐘期耳。高閑自可親（常建）聞君投此曲。所貴知音難（長卿）鐘期久能琴（李端）遠近新相知。流水意何極（劉脊虛）匣琴流水自須彈（杜甫）知音寥落好誰操（中行）掩關無一事。祇自憶知音（同）朱絃一絕少知音（魏裳）君自調傳流水調（世貞）聞道朱絃多悵望。莫將流水變人疑（同）朱絃莫易向人彈（同）

英一君

朝鮮及滿洲記者　古志斌郎

英一君は今年拾三歳になつて南山小學校の六年生である、英一君の父は鮮人で母は内地人である、英一君の家庭は純日本式で食事から衣服から、其の交際する人々も無論内地人が多いのである、僕も其の交際する一人である。

英一君は一人子で裕かでは無いが其の日〳〵に不自由を感ずることなく、將來中學から高等學校、大學まで行く積りで勉强を續けて居る、氣質も極めて快活な强健な身體の持主である。

然るに英一君には常に暗い影が附纏うて居る、それは現在のお母さんが後妻で鮮人――勿論日本化して家庭に適應した――であるからだ、鮮人でも決して生さぬ仲を生地にあらはす樣な性格の人ではない、クリスチャンとして相當修養も積んで居る、英一君に對して愛情も持つて居る、英一君も時には思ふ存分甘えることもある、それでやはり暗い影が離れぬ。

英一君のお父さんは子煩惱で、外出した歸るさには何か土産を持つて歸る、時節に應じた調度はお父さんが買うて與れる、此場合にはお母さんにも何か必ず買うて與える、お父さんの胸中は賢こい英一に推察が出來る、推察が出來るだけそれだけ餘計にお父さんの愛情が身に應える、それでやはり暗い影は離れぬ。

お父さんが居らぬ時は多く外で遊ぶか、友人の家に遊びに行く、先生から與えられた宿題を心にかけながら、遊びに行く、遊びながら時々宿題のことを考えるそれでも家に歸つて宿題をやる氣にはならぬ、日の暮れるまで遊ぶ、日が暮れてお父さんが歸らなければ又外出して遊ぶ、時に食事を忘れて遊ぶで居る。

お父さんが歸つて來ると急に明るい心地になつて家に歸る、宿題を勵むべく机に向ふ、お父さんに成績を見せて批評を聞くのが樂しく感ぜられる。

賢こい英ちやんには時に母の仕打が冷かであるかの如く考えられる、それは眞實のお母さんで無いからだと思はぬでもないが、こんな時は思ひ切つてお母さんに甘える、これは英ちやんの政策である、此政策にうまく乘つて多くの場合お母さんが英ちやんの要求を容れる事になる。

友人甲乙は英ちやんを鮮人として輕蔑する樣な態度は更に見えぬ、學校の先生も決して差別的な待遇はせぬ、英一の家を訪ねて來る父の友人も自分を鮮人の子として特種な觀察をして居らぬことを英一はよく知つて居る。

暗い影、此暗い影は何時この可憐な英一から離れて行くか、それは英一の心から求めて得るであらうか、教師又は友人からの薫育からか、父の愛若くは母の慈しみの發露からか、英一の前途は霧に包まれて居るやうに感ぜられる。

た女ではなかつた。永遠の契緣に結ばれた夫婦愛を胚胎する戀に生きたのであらう。斯うした性格

たより

朝鮮ホテル　伊藤龍

『どの繪葉書がよくて』――金剛山の諸々、雅趣豐かな自然景の寫眞を刷り込んだ數枚の繪葉書を一枚々々順々に手に取りあげつゝ――『これがいゝわ』勝美は、どれにしようか、選擇するに、自分の感じから生ずる鑑別では物足りないと想つたか友の敏子に相談するのであつた。

『そうね可成く、海金剛の景色の方がよくてよ、內地の人々には斯う云ふ景色が珍しいと思ふわ』

『じや、これと之にするわ』結局勝美は、海金剛の玄武岩の屹立する姿、怒濤の打ち寄せる點在した岩石、叢石亭の晩景など總て壯觀と奇勝の絕佳な自然景……等等數枚を選んで、別に取り除けた。

『敏子さん、あたし、一寸失禮するわ』

『どうぞ御悠くつり、おしたゝめなさい』

『有難う』立ち去らうとした勝美の背に浴びせ掛ける樣に、不意に、敏子は揶揄半分に囁いた。『誰にお便りするの、戀人なの？』

『いゝゑ』別段に振り返らうともしないで、否定の言葉を殘して座を去つた。

眞晝の熱し切つた太陽の光線が軒下から垂れ懸かる簾を透して樣先に落ちて居た。庭の梢から、振り落ちて流れ來る涼しい風は、折に觸れて、簾の裾のほとりを輕く捲き上げて居た。

紙葉に訪れるペンの音律は勝美の心に描いた囁きであらう。

やがて、書き終へたので『敏子さん、讀んで頂戴な、戀人つて、巫山戲るのじやなくてよ』敏子は自分の想像にもつと價値附け樣としたか、讀み始めた。『あら、叔父さんやら、伯母さんの所ばかしね、好きな御方のが書いてないじやなくて、きつと、見せるのが氣まり悪いのでせうから隱して了つたのだわ、ホ、、、、』想像を裏切られて忌々しい感情を、云ふ聲に含ませながら猶更の疑惑を構成した。敏子の懷疑の無獸な煩しさも、勝美としては中傷の甚しい行爲としか考へられなかつたらしい怨めしそうに敏子の顏を打眺めた

懷しの搖籃の土地を離れ、呪はれた運命の戲れか、獨り旅路に稼いで自活する勝美も年頃なれば、敏子の疑心に先立ちて、異性の溫い腕に抱かれて見たかつたであらう。勝氣な彼女としては、架空的な戀の誘ひに引き摺られる程の不用意ではなかつた。思慮の深い女であつた。男性の本質を呑み込むだけの考慮のある女であつた。女性の命を物質的に弄ぶ輕擧みのした女ではなかつた。永遠の契緣に結ばれた夫婦愛を胚胎する戀に生きたいのであらう。斯うした性格の、斯うした希望の彼女は、情氣を見越した戀の紅筆を走らす必要には迫まられて居なかつた。敏子の期待に對應する戀の持ち合はせはなつかた。けれども、未來の或る日、女性の眞實の心芽は、やがては、ほんとうの讃へられた戀愛行路に辿りつくでもあらう。

現在の彼女の容姿から醱酵する馨は、處女林に生きる青葉のそれに外ならないのであつた。

したゝめる便りでなく、幸ある戀人の惠まれた其日の勝美の消息が聞きたい。（一九二五、七、三）

◈夏雲奇峰集

平田久雄

足立（丈次郎氏）さんと旅行、旅行と歌とは、ピッタリ喰付いたものである▲この頃、東萊溫泉に數浴せられたらしく、下のやうな歌が、おたよりの端にしてあつた『雨そそぐ青葉をもるゝともし火のかげも涼しき湯の宿鳴門』▲鈴木商店の澤村さんからハガキが來る、一便おくれて原稿が來る、そしてハガキに曰く『近來とても多忙なので、これで今年中の文債に代へてくれ』……要領のいゝのに敬服する▲多忙といへば、日本ビールの川上さん、目下ビールの最活動期なので、東奔西走、一寸の閑もないらしい▲しかし、流石に茶道で少年時代から叩き込んだ人だけに、一寸もそわ〳〵した處は見せない▲快くゆつくりと客を引いて悠々談笑して居る處は流石

京城雜筆

父

永樂町人

○

私の父は、若い時は、相當勉强したものらしく、支那の書物なら大底とゝのへて居た。

果して父の頭に這入つたものかどうか知らぬが、老莊や揚墨まで兎に角ひと通りそろつて居たから感心する。

それに、或時代は、たしかに肝血をしぼつたと思はれるのは、どの書物にも、嚴重細密な朱筆を加えて居ることである。

○

今の私には、到底あの汗牛充棟の形象文字と、一ツ〳〵ねぢ合つて見る元氣はない。

おやぢの方が、私よりはマジメだつたんだね。

○

晩年には、殆どむつかしい本は讀まなかつた。

どうかすると、樣先などで、老眼鏡で、高等郎を讀んでる位のもの。

多くは、講談を讀んで居た——

間がな隙がな武勇傳を讀んで居た

そして、母なんかの話を聽くと漢籍時代よりも、よつぽど何事でも相談しよくなつたといつて居た

○

私は、謙我慢して、父が諸氏百家を、平押しに押してゐたその苦痛を思ふ。

○

講談——武勇傳が、漢學者の家庭を、まろやかにしたのは、面白いでないか。

○

私は、柳宗元の文章が好きで、時々難字を父に問ふたことがある

二十二三の析でもあらうか。

すると、父は『文章はやつぱり韓退之がいゝよ、ずつと遡ると、無論太史公のやうな人もあるけれど』父は、いつも退之びいきだつた。

○

今になつて私は、退之の詩を、非常に珍重して居る。けれど、文章は昔ながらに、あまり感心しない。

○

父が和本——國學方面の書を讀んだのは、十代若くは二十代の時らしく（これは、祖父が國學を好み、それから强ゐられたものらしい）源氏の寫本や、古今集の註釋（手記）やが、今尙ほ殘つて居る

中學の何年生かの析、暑中休暇に、私が太平記や、狹衣物語などを亂讀して居ると『うむ、若いものがソンナものを讀むのはいゝ、だが同じ讀むなら大鏡も讀むがいゝ』その大鏡は、そのころ一向面白くなかつた。が近來漸く味がわかつて來た。

○

晩年には、句なども作つた、無論舊派である。

中學四五年で、生意氣盛り、『古池やなンて何がいゝんだ』と呟くと、

『イヤ年をとると、大底こゝにやつて來る。俺だつて、以前はさういつたものだよ』

元來、一滴の酒も嗜まなかつたのに、歿前の五六年瓢罩など買つて居た。

そして『この年になると、陶潛先生がわかる……』としみ〳〵いつたものだ。

○

すれば、父の學問上、思想上、人生觀上の戸籍は、何處へ持つて行つたものか——。

◈殺生阪の記

小野久太郎

松本さん、私の社の前の坂道をお向ひの岡村介石さんが京城雜筆で小唄坂と稱して以來人口に膾炙されて居ます、確に小唄坂の名の通り妙な哀調を帶びた現代的小唄を若い學生連からウルサイ程聞かされます、併し之は夜更けの事で朝から夕まで永い間目につくものは重い事を輓いた人間と馬との苦しんで居ることです、殊に毎日馬の苦しみ方は一通りでありませぬ、軍隊の廢馬、而も輓馬でなくて乘馬の廢物に重荷を輓かすのですから退職官吏に人力車を輓かすやうもので、實に殺生も甚だしい、私は之を殺生坂と思つて居ます、目で見ては殺生坂、耳で聞いては小唄坂、即ち書は殺生坂で夜は小唄坂、何れは生を殺す不吉坂と思つて此の坂のなくなる日を待つて居ます。

◎寺尾さんのお宅附近が、最もので、これには大に弱つて了つた

編輯後記

雜筆同人

◎本誌の寄稿家、愛讀者で、今回の水害のため受難せられた方尠からず、謹んで御見舞申上げます尙實はあの十九日の日社員社友兩三名で、闇と雨を衝いて龍山に向ひましたが、モウその時は一面の大濁水で、如何ともしやうが御座いませんでした。

◎寺尾さんのお宅附近が、最もヒドイやうで、何と申上げていゝか解りまん、今ではマダお立退先さへ私の處へは判つて居ないのです、ほんとに心配です。

◎あの電燈が消え、水道が絶えつゝいて新聞さへ發行出來ず、夜深うして頻りに警鐘の殷々たるを聞く物凄さ——思ふに一生のおもひ出でせう。

◎丁度その頃原稿は五分の四以上を工場に送つて居たので、不足といふ心配はなかつたが、主幹並に石川君が同日から病床についたので、これには大に弱つて了つた

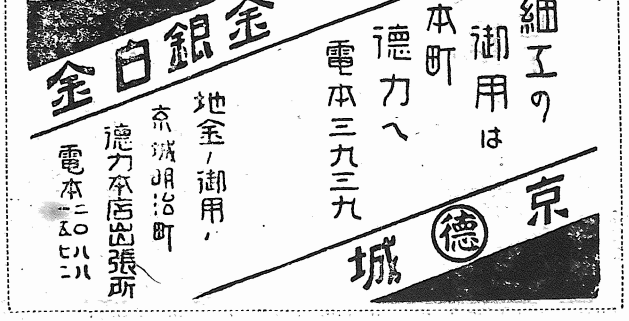
◎仁川の茂木さんの稿は、うれしかつた、あの時は丁度百萬の援兵一時に來るとでもいふ氣持がしました。

晩年には、句なども作つた、無

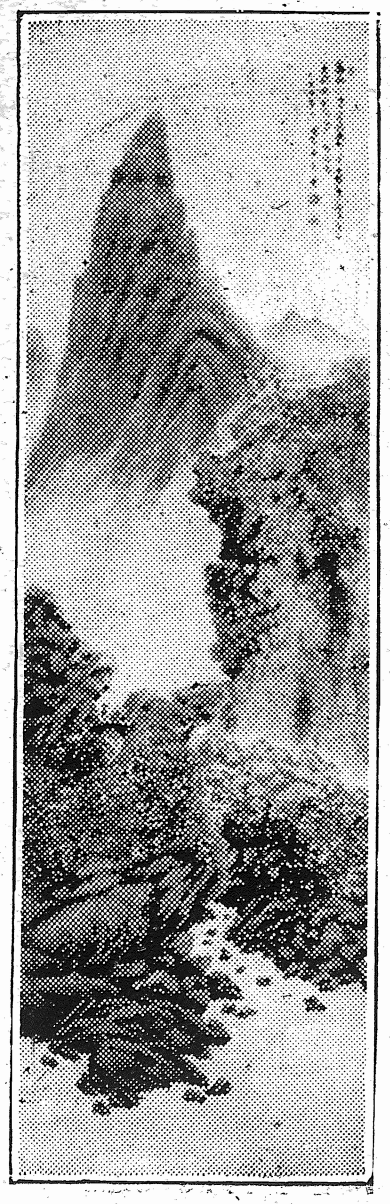
雜筆の廣告について

弊社に於ては、本年三月號より同七月號までの新規廣告を、便宜上社外の人をして取扱はしめしところ、弊害續出各方面に御迷惑をかけたること少からずと聞き、恐縮し居れり、依つてこのたび話し合ひの上依托を解き、爾來（七月一日より）專ら本社に於て、直接取扱ふこととせり、どうか御含み置きを乞ふ。

八月一日　京城雜筆社



大正十四年七月三十日印刷
大正十四年八月一日發行
一部定價金四十五錢
京城府和泉町一六四
發行兼編輯人　松本武正
印刷人　石川利夫
印刷所　京城日報社
京城府和泉町一六四
發行所　京城雜筆社
電話光化門三〇六番



衣笠中央婦人病院長筆

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺ぐべからざるものであります

德用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九七 九八

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
振替 京城四五六八番

夏向背廣服
同 オーバ
レインコート
新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豐富

▲御注文に應じ特製仕候

京城鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
振替京城一八四三番

サクラビール
ミヨシレモン
鈴木商店
京城支店

南山荘
市内西四軒町
電話本局 一五一三 三五八五番

京城日日新聞

社長　有馬純吉

朝鮮及滿州

社長　釋尾東邦

謹謝水害御見舞

當時小生黄海道に旅行致し居り
御尊名御伺ひ洩れの向も可有之
不取敢以紙上御禮申上候

京城府漢江通十五番地
寺尾猛三郎
電話龍山 五一二番
一〇二〇番

暑中御見舞

旭町　瀬戸病院

明治町　京城中央婦人病院

明治町　中島病院

永樂町　木戸歯科醫院

吉野町　木村醫院

暑中御見舞

櫻井秀專
進辰馬
堀内滿輔
鈴木文次郎
高橋章之助
濱吉太郎
川端三次郎
麻生音波

暑中御見舞

鎭南浦　西崎鶴太郎
京城　富田儀作
鎭南浦　川添種一郎
釜山　永見京造
木浦　福田有造
平壤　松井民次郎
木浦　島澤岩太郎
釜山　芥川正

均質牛乳

牛乳界の大革命

日本最初の試み

均質牛乳の特徴は

脂肪を粉碎して居ります故に消化が宜しく風味の佳良と獸臭のない事は一度召上つた方には直覺せられます長らく腐敗しませぬから小兒や病人の方々にはこの均質牛乳に限ります品質本位であります値段の競爭をせないのは弊場の主義生命であります。

朝鮮總督府病院特定御用
陸軍衞戍病院御用
京城府內各病院御用

平山牧場

電話光化門一三三番
京城東小門外

京城日報

京城黃金町三丁目

朝鮮教育普成株式會社

社長 高橋章之助

電話本局一九四八番

振替京城四六二七番

朝鮮總督府警務局衛生課効力證明

防臭
殺虫
殺菌

神阪式乳劑

價格が廉で蠅の發生を防ぎチブス赤痢等の傳染病菌を殺し便所其他不潔な場所の臭氣を防ぎ止める事の出來るものは純良な石油乳劑に及ぶものはありませぬ神阪式乳劑は此目的を達する爲めに大正十年以來研究に研究を重ねて完成したものであつて夏期消毒藥としては缺ぐべからざるものであります

純白な牛乳のやうな液汁を撒いて臭氣を去り芳香を放つ神阪式乳劑を是非御使用あれ今回の水害地清潔法には當局はすべて神阪式乳劑をお用ひになりました

使用法……清水五十倍に溶解す

定價……一封度入小錠三十五錢四十封入大罐九圓

京城南米倉町二一〇

製造發賣所 朝鮮警察新聞社藥局

（電話本局一三一七番）

電話お掛けになればスグ持參します

京城府明治町二ノ一〇五

榎本法律事務所

辯護士
法學士 榎本隆

（電話本局二八四四）

朝鮮商工株式會社

本社　鎭南浦三和町

◎銘仙と
毛糸◎

京城本町
ちゝ姐や
堀内滿輔
電話本局
八五五番
九〇〇番
〇六五番

◎多少に拘らず御用命
の程を願ひ上げます

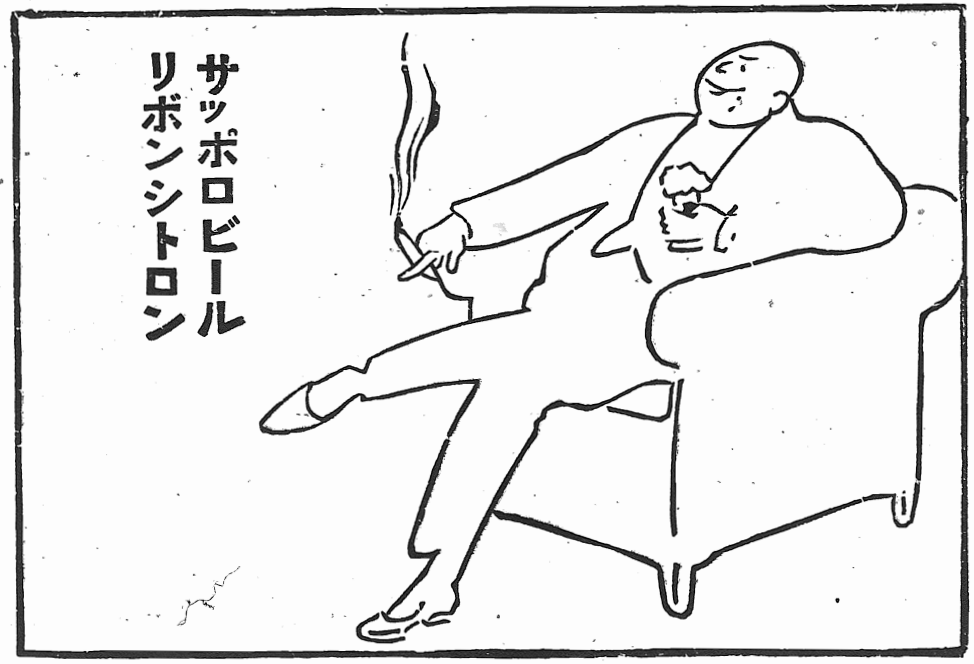
金剛山産松實松花應用菓

金剛飴

金剛柏子（松の實鹽炒り）
金剛柏子菓（朝鮮式松の實菓子）
金剛おこし
金剛しるこ

金剛煎餅
金剛山
金剛羊羹
金剛饅頭

京二城本町丁目
亀屋商店
電話二十七番
本局四七五番



京城雜筆（第七十八號）

大正十三年一月二十九日第三種郵便物認可
大正十四年八月一日發行（毎月一回一日發行）